

小・中学校における指導の調査的研究 I

— グループによる学習指導の実態 —

梶 田 正 巳 塩 田 勢 津 子¹⁾ 石 田 裕 久²⁾
杉 江 修 治³⁾

I 問 題

まず始めに、われわれが本論文の中で用いるグループ学習、あるいはグループによる学習指導の概念を明らかにすることから述べることにしよう。グループ学習、あるいはグループによる学習指導は簡単に述べると、クラスをいくつかの小集団に分けて、学習したり、指導したりすることである。ここではこの言葉をきわめて包括的な意味として用いることにする。それは、学習や指導の一つの形態として、その意味を示すに過ぎない。従って、なぜ、グループにより学習したり、指導すべきであるか、という背景の理念としては、一応切り離して用いることにする。というのは、このような学習や指導の方法は、日本の場合、一定の教育、指導の理念と結合して命名されているので、この点を示しておく必要があるのである。

今日まで、グループによる学習指導は、多くの教師や研究者の関心を集めてきた、このように述べても過言ではあるまい。事柄を教育界に限ってみても、こうした方法を実践したり、さらには普及したりしようと目ざしている各種の民間教育団体が少なからずみられるし、研究者の間でも「教育」と「集団」、「小集団」、などの関連については、さまざまな角度から議論されているのである。

歴史的にみると、こうしたグループによる学習指導の先駆となったのは、明治末に「分団式動的教育法」を提唱した及川平治であったといわれている。こうしたグループの学習指導は、高桑（1971）の「日本における

小集団研究」をみれば、展望が得られるであろう。そこでは、第2次大戦を境として、戦前と戦後に大別し、明治から現在までのグループによる学習指導の概念やそれに裏うちされた実践が解説されているので、非常に参考になる。それをみても、こうした学習や指導が深い根を持ったものであることがよくわかる。

本研究は、先に述べたように、グループによる学習指導の概念や、そうした考え方に確固として従う実践の面から、研究を進めようとするものではない。否、正確に言えば、こうである。グループによる学習指導を、現実実践している教師自身が、なぜその方法に依拠しているか、その理由を問い、明らかにする、こうした意味では、教師の理念を問題としている。しかし、それ以上ではないのである。つまり、教育理念や思想として、あるいはそれとの密接な関連で検討しようとしているのではない。あくまでも、グループによる学習指導に対する教師自身の実践者としての考え方、態度、実態を明らかにすることに主眼を置いている、といってもよい。ここでは、理念や思想の系譜のいかんにかかわりなく、教師が日々の教育実践の中で、どのようにグループによる学習指導を試みているのか、その具体像を明らかにしようとする。これが本研究の主要な関心事である。

以上のような基本的立場に立って、過去のグループによる学習指導の研究を検討してみると、おおよそ、次のような結論に到達する。まず、こうしたグループによる学習指導の実態調査的研究がほとんどないということである。後にも示すように、こうした問題に言及した論文は、われわれの調べたところでは数編を見出したにすぎない。とはいえ、このような実践やそれに対する関心がないかといえば逆である。水沢（1979）の調査的研究では、小学校の教師では90%以上、中学校の教師では80%以上の人々が、かつてあるいは現在もグループによる

* Teaching methods in elementary and junior high schools I

1) 日本学術振興会奨励研究員

2) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期課程）

3) 中京大学助教授

小・中学校における指導の調査的研究 I

学習指導を実践している。しかも、それらの実践がすべてグループによる学習指導の強い特定の信念に裏打ちされているわけでもないのである。つまり、こうした学習指導の方法は、小・中学校ではたいへんポピュラーなやり方になっているといえるだろう。とはいっても、すでに述べたように、われわれは、その実態について十分に認識していない。それが現状なのである。

しかしながら、指導に関する調査的研究がないかといえれば必ずしもそうではない。われわれの手元には、全国教育研究所連盟の「学習指導近代化の課題——教師の学習指導観調査による——」(1971)、宮城教育研究所「学習指導の近代化に関する研究(第1次報告)」(1968)、岸田・池田「学習指導形態に関する調査研究」(1974)などがある。しかし、それらの報告書や論文をみても、グループによる学習指導の様態を明らかにしたものは少ないといえてよい。

それゆえ、本研究では、小・中学校の義務教育段階にある教師を対象に、グループによる学習指導の思想的系譜とは一応離れて、実態調査研究を実施することにした。調査対象の指導領域は、できる限り包括的に捉えるために、大別して学習指導と生活指導に2分している。本報告は、まず、学習指導の領域におけるグループの活用状況を小学校と中学校に分けてまとめたものである。生活指導の領域については、本報告に続く次の部でまとめる。

II 方 法

まず始めに、学習指導領域の調査項目について述べる。具体的な項目の内容は、末尾の資料を参照されたい。質問項目は、全部で12項目よりなる。これは2つの部分に大別される。前半のQ1(質問項目1。以下同様)からQ4までは、グループによる学習指導を他の一斉、個別というような学習指導の形態と対比して捉えようとしたものである。学習指導の領域では、一斉学習、個別学習、グループ学習という術語で検討した。後半のQ5からQ12においては、われわれの主要関心事であるグループによる学習指導について、できる限りその具体像を明らかにするため、さまざまな角度から調査した。そこでは、

グループ学習の回数や時間、グループのリーダー、グループ構成の様態やその編成の期間、グループ学習の評価などについて調べた。また、こうした調査資料を解析する基本的観点として、小学校では学年別(低学年、中学年、高学年)に、中学校では教科別(国語、数学、理科、社会、英語、美術、音楽、保体、技家)に整理を進めている。このように整理の視点を変えたのは、予備的分析によって、特に中学校では学年別の分析よりも、教科制のそれの方がより有意なデータを得られることがわかったためである。とはいえ、場合によっては、両方の視点を組み合わせて整理もした。

次に調査方法に関して、本研究では質問紙の郵送調査を行なった。愛知県下の公立小、中学校の教師を対象に、校長と教頭を除き、小学校の場合は、ランダム・サンプリングを、中学校の場合は、教科を基準としてストラティファイド・サンプリングを使った。これは、昭和53年度愛知県教育関係職員録(財団法人・愛知県教育振興会出版、1978)により行なった。表1-1には、質問紙の発送数(対象被験者数)と返送数(応答被験者数)と返送率を示しておく。対象被験者数は、小学校400、中学校520である。また、返送数は、小学校246、中学校323であった。なお、郵送調査は、昭和54年3月16日(金曜

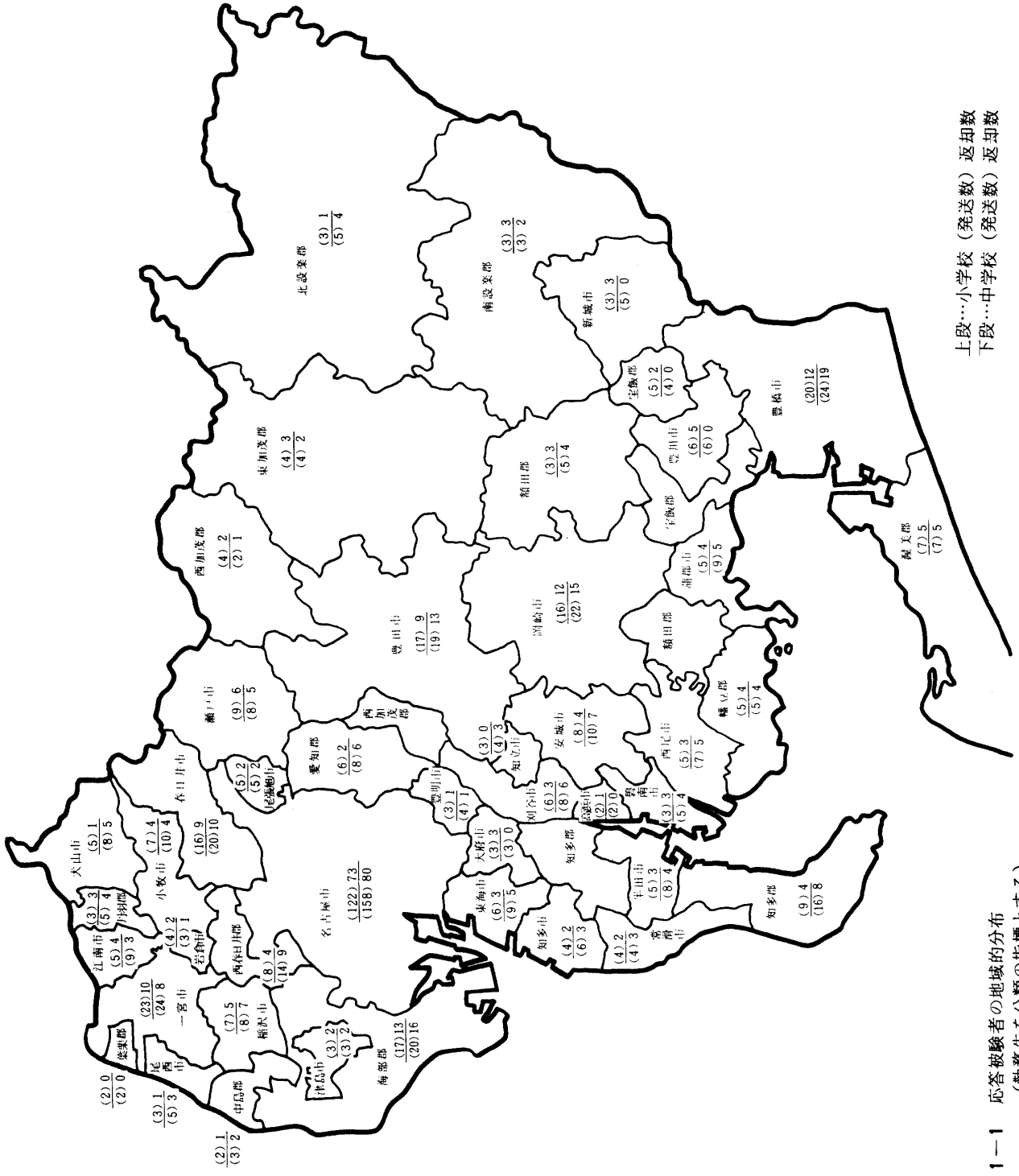
表1-1 質問紙の発送数(対象被験者数)と返送数(応答被験者数)

		発送数	返送数	返送率
小学校		400	246	61.5%
中学校	国語	80	49	61.3
	数学	80	53	66.3
	社会	80	52	65.0
	理科	80	58	72.5
	英語	80	49	61.3
	音楽	30	15	50.0
	美術	30	16	53.3
	保健体育	30	16	53.3
	技術家庭	30	15	50.0
	合計	520	323	62.1

表1-2 学習指導領域の分析対象被験者内訳(小学校の場合)

学年	対象人数	教職経験年数					性別	
		5年未満	5~14年	15~24年	25年以上	無答	男	女
低学年	67	14(20.9)	26(38.8)	7(10.4)	19(28.4)	1(1.5)	21(31.3)	46(68.7)
中学年	77	19(24.7)	23(29.9)	14(18.2)	20(26.0)	1(1.3)	32(41.6)	45(58.4)
高学年	72	14(19.4)	27(37.5)	17(23.6)	13(18.1)	1(1.4)	38(52.8)	34(47.2)
計	216	47(21.8)	76(35.2)	38(17.6)	52(24.1)	3(1.4)	91(42.1)	125(57.9)

()内% 以下同じ



上段…小学校(発送数)返却数
 下段…中学校(発送数)返却数

図1-1 応答被験者の地域的分布
 (勤務先を分類の指標とする)

表 2-1 学習指導領域の分析対象被験者内訳 (中学校の場合)

教科	対象 人数	教 職 経 験 年 数					性 別	
		1～4年	5～14年	15～24年	25年以上	無 答	男	女
国 語	48	7 (14.6)	15 (31.3)	17 (35.4)	9 (18.8)	0	32 (66.7)	16 (33.3)
数 学	52	10 (19.2)	25 (48.1)	12 (23.1)	5 (9.6)	0	44 (84.6)	8 (15.4)
理 科	56	6 (10.7)	21 (37.5)	25 (44.6)	4 (7.1)	0	50 (89.3)	6 (10.7)
社 会	51	6 (11.8)	12 (23.5)	22 (43.1)	11 (21.6)	0	50 (98.0)	1 (2.0)
英 語	48	9 (18.8)	20 (41.7)	14 (29.2)	5 (10.4)	0	34 (70.8)	14 (29.2)
美 術	15	3 (20.0)	3 (20.0)	9 (60.0)	0	0	13 (86.7)	2 (13.3)
音 楽	15	5 (33.3)	3 (20.0)	6 (40.0)	1 (6.7)	0	3 (20.0)	12 (80.0)
保・体	16	2 (12.5)	5 (31.3)	6 (37.5)	1 (6.3)	2 (12.5)	7 (43.8)	9 (56.3)
技・家	15	3 (20.0)	5 (33.3)	4 (26.7)	3 (20.0)	0	6 (40.0)	9 (60.0)
計	316	51 (16.1)	109 (34.5)	115 (36.4)	39 (12.3)	2 (0.6)	239 (75.6)	77 (24.4)

日)に行なわれ、2回のハガキによる督促をしている。この調査は、学年末に実施されているが、これは、過去1年間の学習指導の実態について応答を求めたためである。次に、本報告で有効な資料として分析の対象となった内訳について述べておくことにしたい。先の応答被験者数に比べて、表1-2(小学校)、表2-1(中学校)に示すように、分析対象となった被験者の数に若干の減少がみられている。これは主として、回答拒否(白紙の回答)によるものである。

次に、対象被験者と応答被験者の地域的な分布を示しておきたい。これは、小・中学校の別に示しているが、被験者となった教師の住所ではなく、勤務先の市・郡の単位でまとめたものである(図1-1 参照)。

III 結果と考察

III-1 小学校の学習指導

1 学習指導形態に関する調査

1) 現在用いられている学習指導形態

表1-3～1-5は、過去1年間(1978年度)に担当した授業の展開の中で、どのような学習形態を重視して用いたかについて尋ねた結果を、低学年(1, 2年)、中学年(3, 4年)、高学年(5, 6年)に分けて示したものである。ここでの一斉学習としては、学級全員を対象として同一内容を同時に指導する形態、グループ学習とは、学級を分団または小グループに分けて指導する形態、個別学習とは、生徒一人一人を対象として指導する形態、と定義して回答を求めた。

表1-3から、低学年についてみると、いずれの教科においても、一斉学習および一斉学習を含む複合形態を用いる割合が高い。国語では、一斉学習単独の形態が最もよく用いられており(37%)、次いで、一斉・個別の複合形態が多くなっている。算数、図工では、一斉・

個別学習が多く、特に算数は60%近くがこの形態を用いている。また、理科、社会では、一斉とグループ学習の複合形態を用いる場合が多く、ともに50%以上の割合を示している。さらに体育では、一斉・グループ・個別の複合形態が多く、音楽では一斉を含む4種の形態をほぼ均等に(10～30%)用いている。

こうした傾向は、中学年(表1-4)でも同様にみうけられる。ただ、理科において、低学年よりもグループ学習を用いる割合が増加していること(31%)が目される。

表1-5をみると、高学年は、中学年と同様の傾向を示しているといえる。高学年で新しく加わる技家は、体育と同じように、一斉・グループ・個別の複合形態が最も多く(約38%)、次いで一斉・グループ学習(32%)となっている。

これらのことから、一般的に、一斉学習および一斉学習を取り入れた複合形態を用いる割合が、いずれの教科、学年においても多くなっていることがわかる。これは、一斉学習の内容が、クラス全員を対象とした説明・解説・講義・まとめなどであり、どの教科においても、授業の展開上必要不可欠であるためと考えられる。ただ、一斉を含む4種の指導形態のいずれを最もよく用いているかは、教科によって異なっている。また、理科では、中・高学年に至って、グループ学習の割合が高くなっていることが注目された。これは、教科の特質によるものと考えられる。

授業で重視して用いた学習指導形態について、それを用いる理由を尋ねた結果が表1-6である。ここでは、学年、教科を込みにして示す。

一斉学習では、授業内容の理解に有効である(44%)という理由が多く、次いで、授業のスムーズな進行(35%)、教師の臨機応変な対処が可能、教材・器具の都合上、授業計画が容易(13～14%)といった授業進行上の理由

資 料

表 1-3 低学年の学習指導形態〔Q 1-(1)〕

形態 教科	一斉学習	グループ 学習	個別学習	一斉とグループ 学習	グループと 個別学習	一斉と個別 学習	一斉とグループ と個別学習	その他
国語(N=67)	25 (37.3)	2 (3.0)	0	10 (14.9)	1 (1.5)	22 (32.8)	5 (7.5)	2 (3.0)
算数(N=67)	14 (20.9)	1 (1.5)	4 (6.0)	1 (1.5)	1 (1.5)	39 (58.2)	6 (9.0)	1 (1.5)
理科(N=66)	8 (12.1)	10 (15.2)	0	39 (59.1)	2 (3.0)	1 (1.5)	5 (7.6)	1 (1.5)
社会(N=67)	17 (25.4)	1 (1.5)	0	37 (55.2)	1 (1.5)	2 (3.0)	7 (10.4)	2 (3.0)
図工(N=65)	4 (6.2)	0	8 (12.3)	9 (13.4)	8 (12.3)	28 (43.1)	8 (12.3)	0
音楽(N=61)	17 (27.9)	0	0	6 (9.8)	0	19 (31.1)	19 (31.1)	0
体育(N=66)	11 (16.7)	0	0	15 (22.7)	3 (4.5)	5 (7.6)	32 (48.5)	0

表 1-4 中学年の学習指導形態〔Q 1-(1)〕

形態 教科	一斉学習	グループ 学習	個別学習	一斉とグループ 学習	グループと 個別学習	一斉と個別 学習	一斉とグループ と個別学習	その他
国語(N=77)	43 (55.8)	0	0	14 (18.2)	0	14 (18.2)	5 (6.5)	1 (1.3)
算数(N=77)	11 (14.3)	0	0	5 (6.5)	1 (1.3)	52 (67.5)	7 (9.1)	1 (1.3)
理科(N=74)	4 (5.2)	24 (31.2)	0	35 (45.5)	6 (8.1)	0	4 (5.2)	1 (1.4)
社会(N=75)	11 (14.7)	3 (4.0)	0	50 (66.7)	0	2 (2.7)	8 (10.7)	1 (1.3)
図工(N=67)	7 (10.4)	1 (1.5)	10 (14.9)	9 (13.4)	9 (13.4)	20 (29.9)	11 (16.4)	0
音楽(N=55)	21 (38.2)	0	0	7 (12.7)	0	11 (20.0)	14 (25.6)	2 (3.7)
体育(N=73)	10 (13.7)	0	0	24 (32.9)	3 (4.1)	11 (15.1)	24 (32.9)	1 (1.4)

表 1-5 高学年の学習指導形態〔Q 1-(1)〕

形態 教科	一斉学習	グループ 学習	個別学習	一斉とグループ 学習	グループと 個別学習	一斉と個別 学習	一斉とグループ と個別学習	その他
国語(N=72)	38 (52.8)	2 (2.8)	0	13 (18.1)	0	10 (13.9)	8 (11.1)	1 (1.4)
算数(N=72)	2 (2.5)	3 (4.2)	2 (2.8)	5 (6.9)	1 (1.4)	38 (52.8)	13 (18.1)	1 (1.4)
理科(N=65)	2 (3.1)	22 (33.8)	0	32 (49.2)	2 (3.1)	1 (1.5)	5 (7.7)	1 (1.5)
社会(N=68)	7 (10.3)	3 (4.4)	0	46 (67.6)	0	4 (5.9)	7 (10.3)	1 (1.5)
図工(N=54)	3 (5.6)	1 (1.9)	7 (13.0)	6 (11.1)	6 (11.1)	23 (42.6)	7 (13.0)	1 (1.9)
音楽(N=29)	8 (27.6)	1 (3.4)	1 (3.4)	7 (24.1)	1 (3.4)	4 (13.8)	7 (24.1)	0
体育(N=62)	6 (9.7)	6 (9.7)	0	17 (27.4)	4 (6.5)	9 (14.5)	20 (32.3)	0
技家(N=37)	2 (5.4)	3 (8.1)	0	12 (32.4)	1 (3.1)	5 (13.5)	14 (37.8)	0

を多くあげている。グループ学習では、教材・器具の都合上を、約40%の者が理由にあげている。これは、主にグループ学習を用いているのが、理科・技家であり、特別教室などを用いて授業を行なうというような、教科の特質によるものと考えられる。さらに、グループ学習では、学習の参加度が高まる(36%)、人間関係の育成、効果的な相互交渉、思考の深まり、グループ意識の育成(約10~20%)といった、学習の動議づけ、仲間関係を重視した、学習の態度的側面での理由が多くあげられているのが特徴的である。個別学習では、能力・適性に応ずるためとする理由が最も多く(62%)、次いで、落ちこぼれをふせぐ(12%)、主体性の育成(22%)が多くなっている。一斉学習、グループ学習、個別学習が組み合わせられ、複合形態として用いられる際には、全般に、その理由についても、それぞれの理由が加算的にあげられている。

一斉・グループ学習の複合形態では、一斉学習が単独で用いられる場合よりも、授業進行上の都合による理由の割合が全体的に減少するとともに、協調性を育てるという理由(16%)が増加しており、グループ学習の特徴としてあげられている学習の態度的側面についての理由が多くなっている。グループ・個別学習では、グループ学習、個別学習のそれぞれの理由に加え、授業内容の理解に有効(16%)、協調性を育てる(22%)という理由が増加している。この形態を多く用いているのは、図工であり、教科の特質を反映しているものと考えられる。一斉・個別学習では、単独の場合の一斉学習の理由に比べて、授業の進行上の理由が著しく減少している。この形態では、落ちこぼれをふせぐ、能力・適性に応ずるという理由が多く、ともに40%以上の割合を示し、個別学習の特徴を多くあげているのが注目される。最後に、一斉・グ

小・中学校における指導の調査的研究 I

表 1-6 学習指導形態を用いる理由*〔Q1-(2)〕

理由 (内項目番号)	学習指導形態	一斉学習 (N=278)	グループ学習 (N=83)	個別学習 (N=32)	一斉・グループ 学習 (N=399)	グループ・個別 学習 (N=50)	一斉・個別 学習 (N=320)	一斉・グループ・ 個別学習 (N=236)
授業内容の理解に有効 (5)		123 (44.2)	6 (7.2)	0	57 (14.3)	8 (16.0)	63 (19.7)	24 (10.2)
知識の定着をはかる (11)		15 (5.4)	3 (3.6)	2 (6.3)	28 (7.0)	0	35 (10.9)	16 (6.8)
学力の向上をはかる (19)		6 (2.2)	1 (1.2)	0	5 (1.3)	0	13 (4.1)	19 (8.1)
落ちこぼれをふせぐ (2)		5 (1.8)	6 (7.2)	4 (12.5)	13 (3.3)	3 (6.0)	155 (48.4)	43 (18.2)
能力・適性に応ずる (10)		0	4 (4.8)	20 (62.5)	32 (8.0)	14 (28.0)	139 (43.4)	99 (41.9)
能力差をなくす (15)		1 (0.4)	0	1 (3.1)	11 (2.8)	2 (4.0)	29 (9.1)	13 (5.5)
劣等感・疎外感を減ずる (18)		4 (1.4)	1 (1.2)	1 (3.1)	1 (0.3)	0	5 (1.6)	7 (3.0)
人間関係・仲間意識の育成 (6)		4 (1.4)	10 (12.0)	1 (3.1)	70 (17.5)	7 (14.0)	9 (2.8)	60 (25.4)
競争をさける (8)		1 (0.4)	2 (2.4)	2 (6.3)	1 (0.3)	0	0	3 (1.3)
協調性を育てる (14)		3 (1.1)	7 (8.4)	0	63 (15.8)	11 (22.0)	5 (1.6)	33 (14.0)
効果的な相互交渉 (4)		4 (1.4)	12 (14.5)	1 (3.1)	51 (12.8)	7 (14.0)	4 (1.3)	20 (8.5)
競争心の活用 (21)		0	2 (2.4)	0	17 (4.3)	3 (6.0)	4 (1.3)	23 (9.7)
討論による思考の深化 (17)		17 (6.1)	16 (19.3)	0	89 (22.3)	4 (8.0)	10 (3.1)	25 (10.6)
相互批判の場として (22)		2 (0.7)	3 (3.6)	0	12 (3.0)	4 (8.0)	4 (1.3)	24 (10.2)
グループ意識の育成 (12)		1 (0.4)	9 (10.8)	1 (3.1)	49 (12.3)	4 (8.0)	3 (0.9)	30 (12.7)
学習の満足度を高める (13)		2 (0.7)	0	0	22 (5.5)	2 (4.0)	5 (1.6)	14 (5.9)
学習の参加度を高める (16)		6 (2.2)	30 (36.1)	1 (3.1)	80 (20.1)	8 (16.0)	12 (3.8)	40 (16.9)
主体性を育てる (20)		1 (0.4)	7 (8.4)	7 (21.9)	47 (11.8)	8 (16.0)	21 (6.6)	53 (22.5)
教材・器具の都合上 (1)		38 (13.7)	33 (39.8)	0	77 (19.3)	10 (20.0)	20 (6.3)	33 (14.0)
授業のスムーズな進行 (3)		98 (35.3)	2 (2.4)	0	45 (11.3)	0	31 (9.7)	15 (6.4)
授業計画が容易 (7)		35 (12.6)	2 (2.4)	0	15 (3.8)	0	10 (3.1)	6 (2.5)
教師の臨機応変な対処が可能 (9)		40 (14.4)	1 (1.2)	0	11 (2.8)	0	17 (5.3)	5 (2.1)
その他 (23・24)		11 (4.0)	0	1 (3.1)	0	0	1 (0.3)	3 (1.3)

*複数選択項目

グループ・個別の複合形態では、ほぼ3つの学習形態に対するそれぞれの理由が加算的にあげられているといえる。

通常の1時限の授業時間において、最も頻繁に行なわれた授業の流れ(展開)を、そこで用いられた一斉(C)グループ(G)、個別(I)という学習指導形態によって表わすことを求めた結果を表1-7に示す。これは、特定の教科を想定した設問ではないので、教科による特徴について知ることはできないが、授業の流れの一般的傾向をうかがうことはできよう。ここでは、低、中、高学年それぞれ、最も多く用いられた授業パターンのうち、上位5つないしは6つを表中に示した。この結果から、1時限の授業の流れを導入-展開-まとめと大きく3つに分けるならば、一般に、導入部およびまとめでは、一斉学習の形態が用いられ、展開部では、グループ学習、個別学習、もしくはその両方が行なわれているということができよう。

具体的にみるならば、低学年では、上位4つの授業パターンは、すべて上述のような流れであると考えられる。また、中、高学年においても、最初から最後まで一斉学習を行なうというパターンを除いては、すべて導入、まとめで一斉学習を用い、展開部でグループ、個別学習を行なうという形になっている。ただ、こうした授業の流

れのパターンについては、今後、教科の特色を考え合わせて、それらの相違について吟味していくことが必要であろう。

表 1-7 1時間の授業の流れのパターン*〔Q2〕

学年	授業のパターン	頻度(%)
低 学 年 (n=67)	C→G→C	29 (43.3)
	C→I→C	23 (34.3)
	C→I→G→C	20 (29.9)
	C→G→I→C	12 (17.9)
	C→I	12 (17.9)
中 学 年 (n=77)	C	12 (17.9)
	C→I→C	37 (48.1)
	C→G→C	35 (45.5)
	C	21 (27.3)
	C→I→G→C	20 (26.0)
高 学 年 (n=72)	C→G→I→C	15 (19.5)
	C→I→G→C	35 (48.6)
	C→G→C	34 (47.2)
	C→I→C	30 (41.7)
	C→G→I→C	15 (20.8)
C	12 (16.7)	

*複数回答項目

Cは一斉学習、Gはグループ、Iは個別学習を示す。

2) 学習指導形態別にみた学級の諸特徴

表1-8～1-12は、それぞれの教師が多く用いたとした学習指導形態のもとでの、学級における子どもたちのまとめり具合(表1-8)、カリキュラムの進行の程度(表1-9)、授業への子どもの参加度(表1-10)、子どもの学力の向上度(表1-11)、子どもの意見発表の程度(表1-12)、について尋ねた結果である。なお、これらの表は、教科および学年を込みにしたものである。

表1-8は、学級全体の子どもたちのまとめり具合がどのようであるかを尋ねたものである。これによると、いずれの指導形態においても、非常にまとまっている、まとまっていると答えた教師が70～80%以上を占めており、指導形態による相違はあまりみられない。ただ、一斉学習を単独で用いている場合には、あまりまとまっていない、まとまっていない、と答えた教師が合わせて20%以上もみられ、他の指導形態よりも、学級内のまとめ

りが悪いとする回答がやや多くなっているのが注目される。

表1-9は、カリキュラムが予定どおり進行したかどうかを尋ねた結果である。この表から明らかなように、どの指導形態においても、予定どおりあるいはある程度進行したと答えた教師が85%～90%を占めており、かなり残ってしまったと答えたものは皆無であった。したがって、カリキュラムの進行の程度については、学習指導形態の違いによる差はみられるとはいえない。ただ、グループ学習のみを用いている場合には、他の指導形態と比べて、あまり進行しなかったと答えたものが約15%とやや多くなっている傾向が見うけられた。

子どもたちの授業への取り組み具合について尋ねた結果が表1-10である。これによると、どの指導形態でも65～80%が非常に積極的・かなり積極的に取り組んだと答えており、子どもたちの多くは、授業に積極的に参加

表1-8 学級のまとめり具合〔Q3-(1)〕

指導形態	程度	非常にまとまっている	まとまっている	あまりまとまっていない	まとまっていない	無答
一斉学習(N=278)		47 (16.9)	169 (60.8)	46 (16.5)	16 (5.8)	0
グループ学習(N=83)		21 (25.3)	47 (56.6)	12 (14.5)	3 (3.6)	0
個別学習(N=32)		8 (25.0)	20 (62.5)	3 (9.1)	1 (3.1)	0
一斉・グループ学習(N=399)		89 (22.3)	257 (64.4)	40 (10.0)	11 (2.8)	2 (0.5)
グループ・個別学習(N=50)		16 (32.0)	25 (50.0)	7 (14.0)	2 (4.0)	0
一斉・個別学習(N=320)		70 (21.9)	219 (68.4)	24 (7.5)	4 (1.3)	3 (0.9)
一斉・グループ・個別学習(N=236)		75 (31.8)	138 (58.5)	21 (8.9)	0	2 (0.8)

表1-9 カリキュラムの進行度〔Q3-(2)〕

指導形態	程度	予定どおり進行	ある程度進行	あまり進行せず	残った	無答
一斉学習(N=278)		127 (45.7)	129 (46.4)	22 (7.9)	0	0
グループ学習(N=83)		33 (39.8)	38 (45.8)	12 (14.5)	0	0
個別学習(N=32)		15 (46.9)	16 (50.0)	1 (3.1)	0	0
一斉・グループ学習(N=399)		193 (48.4)	172 (43.1)	32 (8.0)	0	2 (0.5)
グループ・個別学習(N=50)		25 (50.0)	21 (42.0)	4 (8.0)	0	0
一斉・個別学習(N=320)		158 (49.4)	145 (45.3)	14 (4.4)	0	3 (0.9)
一斉・グループ・個別学習(N=236)		132 (55.9)	90 (38.1)	12 (5.1)	0	2 (0.8)

表1-10 授業への子どもの参加度〔Q3-(3)〕

指導形態	程度	非常に積極的	かなり積極的	あまり積極的ではない	消極的	無答
一斉学習(N=278)		12 (4.3)	171 (61.5)	80 (28.8)	11 (4.0)	4 (1.4)
グループ学習(N=83)		5 (6.0)	60 (72.3)	17 (20.5)	0	1 (1.2)
個別学習(N=32)		1 (3.1)	21 (65.7)	8 (25.0)	2 (6.3)	0
一斉・グループ学習(N=399)		18 (4.5)	277 (69.4)	91 (22.8)	9 (2.3)	4 (1.0)
グループ・個別学習(N=50)		1 (2.0)	32 (64.0)	14 (28.0)	3 (6.0)	0
一斉・個別学習(N=320)		8 (2.5)	15 (67.2)	77 (24.1)	7 (2.2)	13 (4.1)
一斉・グループ・個別学習(N=236)		19 (8.1)	174 (73.7)	38 (16.1)	0	5 (2.1)

小・中学校における指導の調査的研究 I

していることを示している。また、グループ学習、一斉・グループ・個別学習では、消極的であるという回答が皆無である一方、一斉学習、個別学習、グループ・個別学習においては、約30%が、あまり積極的ではない、消極的であったと回答している。これは、指導形態に特有なものなのか、あるいは、それらの授業の中での用い方によるものなのかを詳しく吟味してみる必要があるだろう。

表1-11は、子どもたちの学力はどのように伸びたかについて回答を求めた結果を表わしたものである。この表をみると、いずれの指導形態でも、約30%以上のものが、よくできる子どもできない子ども全体的に伸びると答えているが、特に、個別学習および一斉・グループ・個別学習では、この割合が高く、約半数が全体的に伸びがみられると答えている。グループ学習の場合には、よくできる子どもだけが伸びるとの回答が40%近くある。一般に、グループ学習は、できる子どもの伸びが押えられると言われていることからみると、この結果は興味深い。さらに、グループ・個別学習の複合形態においては、あまりできない子どもだけが伸びると答えた人が36%と多くみられ、比較的成績のよくない子どもに効果があることを示している。グループ学習、個別学習の2つを除く他の指導形態では、あまり変化なしという回答が10%以上みられ、とくに、一斉学習では20%に至るものが、学力の向上の程度に変化がなかったと答えている。この点について、そ

の原因が指導形態によるものであるならば、今後、どのように改善していくか検討が必要であろう。

子どもたちは自分の意見をはっきり述べるのが、どの程度できたかについて、述べられる子が多い、述べられない子が多い、半々ぐらい、の3件法で尋ねた結果を表1-12に示す。この表によると、どの指導形態もほぼ同様の傾向を示している。すなわち、述べられる子が多いは25%前後、述べられない子が多いは10%前後、半々ぐらいが60%前後であり、指導形態による違いはみられない。

以上、各学習指導形態による、授業のいくつかの側面に対する影響の違いについてみてきた。全般的に、指導形態による顕著な差はみられなかったが、ただ、学力の向上の程度(表1-11)に関しては、既述したように、若干の差異が認められた。

3) 関心のある学習指導形態

ここでは、先に質問した、「現在用いている学習指導形態」とは別に、今後の授業の中で取り入れたいと思う学習指導形態について、回答を求めた。選択肢には、一斉、グループ、個別学習といった指導形態とともに、発見学習、プログラム学習などのより具体的な指導方法をも付け加えた。低・中・高学年別にみた結果を表1-13に示す。一斉学習、グループ学習、個別学習は、どの学年においても、比較的高い割合で選択されている。その中でも、グループ学習は、最も多く、低・中学年においては

表1-11 学力の向上度 [Q3-(4)]

指導形態	程度	全体的にのびる	よくできる子のみのびる	あまりできない子のみのびる	あまり変化なし	無答
一 斉 学 習(N=278)		95 (34.2)	67 (24.1)	41 (14.7)	59 (21.2)	16 (5.8)
グ ル ー プ 学 習(N= 83)		28 (33.7)	31 (37.3)	17 (20.5)	5 (6.0)	2 (2.4)
個 別 学 習(N= 32)		15 (46.9)	6 (18.8)	7 (21.9)	4 (2.5)	0
一 斉・グ ル ー プ 学 習(N=399)		168 (42.1)	67 (16.8)	86 (21.6)	67 (16.8)	11 (2.8)
グ ル ー プ・個 別 学 習(N= 50)		14 (28.0)	11 (22.0)	18 (36.0)	7 (14.0)	0
一 斉・個 別 学 習(N=320)		132 (41.3)	57 (17.8)	72 (22.5)	42 (13.1)	17 (5.3)
一 斉・グ ル ー プ・個 別 学 習(N=236)		137 (58.1)	17 (7.2)	51 (21.6)	24 (10.2)	7 (3.0)

表1-12 子どもの意見発表の程度 [Q3-(5)]

指導形態	程度	述べられる子が多い	半々ぐらい	述べられない子が多い	無答
一 斉 学 習(N=278)		65 (23.4)	178 (64.0)	35 (12.6)	0
グ ル ー プ 学 習(N= 83)		20 (24.1)	52 (62.6)	11 (13.3)	0
個 別 学 習(N= 32)		8 (25.0)	20 (62.5)	4 (12.5)	0
一 斉・グ ル ー プ 学 習(N=399)		113 (28.3)	235 (58.9)	44 (11.0)	7 (1.8)
グ ル ー プ・個 別 学 習(N= 50)		12 (24.0)	33 (66.0)	5 (10.0)	0
一 斉・個 別 学 習(N=320)		76 (23.8)	204 (63.8)	34 (10.6)	6 (1.9)
一 斉・グ ル ー プ・個 別 学 習(N=236)		66 (28.0)	144 (61.0)	18 (7.6)	8 (3.4)

資 料

表 1-13 関心のある学習指導形態*〔Q4〕

学年	形態	一斉学習	グループ学習	個別学習	能力別学習	発見学習	系統学習	問題解決学習
低学年(N=67)		28 (41.8)	34 (50.7)	30 (44.8)	19 (28.4)	11 (16.4)	3 (4.5)	25 (37.3)
中学年(N=77)		30 (39.0)	44 (57.1)	34 (44.2)	16 (20.8)	15 (19.5)	4 (5.2)	35 (45.5)
高学年(N=72)		24 (33.3)	31 (43.1)	21 (29.2)	15 (20.8)	13 (18.1)	5 (6.9)	29 (40.3)
計 (N=216)		82 (38.0)	109 (50.5)	85 (39.4)	50 (23.1)	39 (18.1)	12 (5.6)	89 (41.2)

*複数選択項目

仮説実験学習	プログラム学習	視聴覚学習	主体的学習	その他
8 (11.9)	2 (3.0)	20 (29.9)	18 (26.9)	0
17 (22.1)	5 (6.5)	33 (42.9)	21 (27.3)	0
12 (16.7)	5 (6.9)	24 (33.3)	24 (33.3)	0
37 (17.1)	12 (5.6)	77 (35.6)	63 (29.2)	0

50%以上の選択率を示し、とくに関心の高いことがわかる。また、高学年では、一斉学習、個別学習の割合が少なくなっていることが注目されよう。

その他の具体的な指導方法についてみると、低・中・高学年とも、問題解決学習(約40~45%)、視聴覚学習(約30~40%)、主体的学習(約30%)に高い関心のあることがわかる。

また、能力別学習に対する関心も高く、とくに低学年では30%近くのものを取り入れたいとしていることは、興味深いだろう。

2 グループによる学習指導に関する調査

1) 分析対象者の内訳

質問5(Q5)以降は、過去1年間に、何らかの形でグループ学習を用いた指導を行なったことのある教師の

みを対象にして、回答を求めた。表1-14は、その対象者の内訳を示したものである。全被験者のうちで、これに該当する者の割合は、低・中・高学年ともに98%以上を占めており(表1-14, 対象人数欄)、どの学年においても、何らかの形でグループ学習を用いたとするものが多い。以下、グループ学習の諸側面について、主に低・中・高学年の比較によってみていくこととする。

2) グループ構成について

グループ学習を行なう際のグループ構成人数についての回答結果を表1-15に示す。低学年では、3~4人グループと5~7人グループがそれぞれ約50%ずつという割合になっており、2人グループとするものも1名のみみられる。中学年以降では、2人グループは皆無である。また、学年が上昇するのに伴って、3~4人グループの割合が減少し、5~7人グループが増加する傾向がみら

表 1-14 グループ学習に関する質問・対象者内訳

学年	対象人数	教 職 経 験 年 数					性 別	
		5年未満	5~14年	15~24年	25年以上	無 答	男	女
低学年	66 (98.5)	14 (21.2)	26 (39.4)	6 (9.1)	19 (28.8)	1 (1.5)	20 (30.3)	46 (69.7)
中学年	77 (100.0)	19 (24.7)	23 (29.9)	14 (18.2)	20 (26.0)	1 (1.3)	32 (41.6)	45 (58.4)
高学年	71 (98.6)	14 (19.7)	27 (38.0)	16 (22.5)	13 (18.3)	1 (1.4)	37 (52.1)	34 (47.9)
計	214 (99.1)	47 (22.0)	76 (35.5)	36 (16.8)	52 (24.3)	3 (1.4)	89 (41.6)	125 (58.4)

表 1-15 グループの構成人数〔Q5-(1)〕

学年	人数	2 人	3~4人	5~7人	その他および 無 答
低学年(N=66)		1 (1.5)	33 (50.0)	31 (47.0)	1 (1.5)
中学年(N=77)		0	23 (30.0)	54 (70.1)	0
高学年(N=71)		0	12 (16.9)	56 (78.9)	3 (4.2)
計 (N=214)		1 (0.5)	68 (31.8)	141 (65.9)	4 (1.9)

表 1-16 グループの性構成〔Q5-(2)〕

学年	性構成	男女別々	男女混合	その他および 無 答
低学年(N=66)		1 (1.5)	63 (95.5)	2 (3.0)
中学年(N=77)		3 (3.9)	73 (94.8)	1 (1.3)
高学年(N=71)		5 (7.0)	63 (88.7)	3 (4.2)
計 (N=214)		9 (4.2)	199 (93.0)	6 (2.8)

れ、中・高学年では2/3以上が5～7人グループとなっている。低学年になるほど、少人数によるグループが多いのは、コミュニケーション技能の発達を考慮して、グループ学習の導入を少人数から始めるためであると考えられる。

表1-16は、グループの性構成を男女別にするか、男女混合とするかについて尋ねた結果を表わしたものである。これによると、低・中・高学年とも大部分が男女混合グループとするという回答が殆どである(約90%以上)。ただ、高学年は他の学年に比べて、男女別々のグループの割合がわずかに多くなっている。

3) グループ編成について

ここでは、グループの編成に関して、その編成者、編成の方法(基準)についての回答結果を示す。

表1-17は、グループ編成の主体が誰であるかについての質問結果である。低学年では、教師が編成すると答えた者が多く65%を占めているが、学年が上がるにしたがって、この割合は減少し、高学年では約30%となっている。この傾向とは逆に、教師・生徒が相談して編成すると答えたものは、低学年では27%であるが、学年とともに増加し、高学年では約50%となっている。これらに比べ、生徒が編成とするものは少なく、高学年でも約10%にすぎない。以上のことから、一般に、低学年では教師が編成するケースが多いが、高学年になるにつれて教師・生徒が相談して編成することが多くなるといえる。

また、グループ編成をどのように行なうのかの基準・方法について尋ねた結果は、表1-18である。この表からわかるように、能力・成績について、グループ間が等質となるように配慮するケースが、各学年とも最も多く、約60～70%を占めている。この割合は、高学年になるほ

ど高くなっている。また、予めリーダーを決めてからグループを編成するという割合も、各学年約50～60%とかなり多くなっている。それ以外では、ソシオメトリックテストを使用したり、あるいは好きなもの同士がグループになるようにするといった、学級内の人間関係を基準にする場合も、各学年で10～15%程度みられる。能力別のグループ編成は、低学年で14%弱みられるが、学年の上昇に伴って減少している。名簿順やくじといった機械的な編成は、いずれの学年においてもわずかであった。

4) グループ編成がえについて

次に、グループの編成がえはどのように行なうかについて、編成がえまでの期間、およびその契機の結果を、表1-19、1-20に示す。

表1-19から、グループの編成がえの期間は、各学年とも1学期間でかえると答えたものが最も多く、44～50%を占めている。次いで、必要に応じてかえる(20～27%)、1ヶ月位でかえる(10～14%)の順になっている。この結果から、グループは比較的長期間固定されており、短くても、1ヶ月位は編成がえは行なわれないことがわかる。

また、グループの編成がえは、どのような時に行なうか、という編成がえの契機に関する質問の結果(表1-20)をみってみる。低学年では、教師の判断によるものが最も多い(47%)が、高学年になるにつれて、この割合は減少している(中学年45%、高学年38%)。反対に、決まった期間の経過後にかえるという回答は、低学年で約35%であったものが、学年の上昇とともに増加し、高学年では42%となっている。全般的には、各学年の殆どがこの2つの契機のいずれかによって編成がえを行なっているといえる。

表1-17 グループの編成者〔Q6-1〕

編成者	教師が編成	生徒が編成	教師・生徒の相談で編成	その他
低学年(N=66)	43 (65.1)	2 (3.0)	18 (27.3)	3 (4.5)
中学年(N=77)	36 (46.8)	2 (2.6)	32 (41.6)	7 (9.1)
高学年(N=71)	22 (31.0)	7 (9.9)	36 (50.7)	6 (8.5)
計(N=214)	101 (47.2)	11 (5.1)	86 (40.2)	16 (7.5)

表1-18 グループ編成の基準〔Q6-2〕

基準	ソシオメトリックテストを使用	名簿順	能力別	能力・成績でグループ間等質	先にリーダーを決める	好きなもの同士	くじ	その他
低学年(N=66)	10 (15.2)	2 (3.0)	9 (13.6)	38 (57.6)	32 (48.5)	10 (15.2)	2 (3.0)	5 (7.6)
中学年(N=77)	12 (15.6)	2 (2.6)	9 (11.7)	49 (63.6)	43 (55.8)	7 (9.1)	4 (5.2)	4 (5.2)
高学年(N=71)	8 (11.3)	3 (4.2)	6 (8.4)	49 (69.0)	45 (63.4)	10 (14.1)	5 (7.0)	4 (5.6)
計(N=214)	30 (14.0)	7 (3.3)	24 (11.2)	136 (63.6)	120 (56.1)	27 (16.2)	11 (5.1)	13 (6.1)

*複数選択項目

資 料

表 1-19 グループ編成替えの期間〔Q7-1〕

学年	期間	1ヶ月位	1学期間	半年間位	1年間不変	必要に応じて	その他
低学年(N=66)		7 (10.6)	32 (48.5)	2 (3.0)	0	17 (25.8)	8 (12.1)
中学年(N=77)		11 (14.3)	34 (44.2)	3 (3.9)	0	21 (27.3)	8 (10.4)
高学年(N=71)		9 (12.7)	35 (49.3)	3 (4.2)	0	14 (19.7)	10 (14.1)
計(N=214)		27 (12.6)	101 (47.1)	8 (3.7)	0	52 (24.3)	26 (12.1)

表 1-20 グループ編成替えの契機〔Q7-2〕

学年	契機	決まった期間の経過後	教師の判断	生徒の希望	その他
低学年(N=66)		23 (34.8)	31 (47.0)	4 (6.1)	8 (12.1)
中学年(N=77)		26 (33.8)	35 (45.5)	5 (6.5)	11 (14.3)
高学年(N=71)		30 (42.3)	27 (38.0)	7 (9.9)	7 (9.9)
計(N=214)		79 (36.9)	93 (43.5)	16 (7.5)	26 (12.1)

5) グループ学習の実施状況

ここでは、グループ学習が、どのように実施されているか、その実施の頻度、1時限内の回数、時間について教科別に行なった質問の結果を示す。

表1-21～1-23は、それぞれの教科において、グループ学習をどの位の頻度で実施しているかについて尋ねた結果を、低・中・高の学年別に示したものである。その他の項の具体的な内容は、適宜・必要に応じて行なうという回答が、その殆どを占めている。

表1-21によると、低学年では、理科を除くすべての

教科で、適宜行なうという回答（その他）が最も多くなっている（30～50%）。理科では、1週間に1回行なうという答えが約25%と最も多い。中学年（表1-22）でも理科を除いて、適宜行なうという答えが多いが、社会、体育では、その割合はやや減少している。理科では、毎時間、1週間に1回～数回が、それぞれ30%近く占め、社会でも、1週間に1回～数回、体育では、毎時間という答が比較的多くなっている。さらに、高学年（表1-23）でも、国語、算数、図工、音楽で、適宜行なうという回答が多い。しかし、算数、社会では、1週間に数回

表 1-21 グループ学習の頻度（低学年）〔Q8-1〕

教科	頻度	毎時間	1週間に数回	1週間に1回	2週間に1回	1ヶ月に1回	その他・適宜
国語(N=66)		4 (6.1)	11 (16.7)	6 (9.1)	4 (6.1)	13 (19.7)	28 (42.4)
算数(N=66)		6 (9.1)	4 (6.1)	10 (15.2)	6 (9.1)	8 (12.1)	32 (48.5)
理科(N=65)		9 (13.8)	14 (21.5)	16 (24.6)	9 (13.8)	3 (4.6)	14 (21.5)
社会(N=66)		3 (4.5)	12 (18.2)	7 (10.6)	12 (18.2)	12 (18.2)	20 (30.3)
図工(N=64)		8 (12.5)	1 (1.6)	5 (7.8)	9 (14.1)	16 (25.0)	25 (39.1)
音楽(N=60)		7 (11.7)	4 (6.7)	6 (10.0)	8 (13.3)	8 (13.3)	27 (45.0)
体育(N=65)		13 (20.0)	14 (21.5)	10 (15.4)	2 (3.1)	5 (7.7)	21 (32.3)

表 1-22 グループ学習の頻度（中学年）〔Q8-1〕

教科	頻度	毎時間	1週間に数回	1週間に1回	2週間に1回	1ヶ月に1回	その他・適宜
国語(N=77)		1 (1.3)	17 (22.1)	7 (9.1)	10 (13.0)	9 (11.7)	33 (42.9)
算数(N=77)		3 (3.9)	15 (19.5)	12 (15.6)	5 (6.5)	9 (11.7)	33 (42.9)
理科(N=74)		20 (27.0)	22 (29.7)	22 (29.7)	3 (4.1)	3 (4.1)	4 (5.4)
社会(N=75)		7 (9.3)	17 (22.7)	16 (21.3)	11 (14.7)	7 (9.3)	17 (22.7)
図工(N=67)		6 (9.0)	4 (6.0)	3 (4.5)	5 (7.5)	17 (25.4)	32 (47.8)
音楽(N=55)		5 (9.1)	2 (3.6)	8 (4.5)	7 (12.7)	10 (18.2)	23 (41.8)
体育(N=73)		22 (30.1)	9 (12.3)	7 (9.6)	12 (16.4)	3 (4.1)	21 (28.8)

小・中学校における指導の調査的研究 I

表 1-23 グループ学習の頻度 (高学年) [Q 8-(1)]

頻度 教科	毎時間	1週間に数回	1週間に1回	2週間に1回	1ヶ月に1回	その他・適宜
国語(N=71)	4 (5.6)	14 (19.7)	9 (12.7)	11 (15.5)	14 (19.7)	19 (26.8)
算数(N=71)	6 (8.5)	16 (22.5)	6 (8.5)	4 (5.6)	12 (16.9)	27 (38.0)
理科(N=64)	25 (39.1)	23 (35.9)	13 (20.3)	0	1 (1.6)	2 (3.1)
社会(N=67)	7 (10.4)	20 (29.9)	12 (17.9)	8 (11.9)	12 (17.9)	8 (11.9)
図工(N=53)	10 (18.9)	2 (3.8)	4 (7.5)	4 (7.5)	10 (18.9)	23 (43.4)
音楽(N=29)	5 (17.2)	0	2 (6.9)	6 (20.7)	1 (3.4)	15 (51.7)
体育(N=61)	25 (41.0)	11 (18.0)	2 (3.3)	9 (14.8)	2 (3.3)	12 (19.7)
技家(N=37)	6 (16.2)	5 (13.5)	5 (13.5)	8 (21.6)	7 (18.9)	6 (16.2)

の割合が増加している(約20~30%)。理科では、毎時間、1週間に1回~数回が多く、中学年と同様の傾向をみせている。また体育でも、中学年と同様に毎時間行なうという回答が最も多くなっている(約40%)。

以上について、大雑把に述べるならば、適宜行なうという回答を除いて、グループ学習の頻度は、どの教科でも1週間に数回から、1ヶ月に1回の割合で行なわれているが、理科、体育は、他の教科より頻度が多く、図工、音楽については、やや少なめであるといえるであろう。

各教科のグループ学習の1時限内における回数について、低・中・高学年別に表わしたのが表1-24~1-26である。グループ学習の頻度の場合と同様に、その他の項は、適宜・必要に応じて回数を決める、単元によって異なっている、という内容が大部分であった。

低学年(表1-24)では、1時限内に、1回~2回行

なうと答えたものが合わせて50~70%と過半数を占めている。ただ、理科、音楽、体育では、1時限に3回という回答もやや多くみられた。また、国語、算数、図工、音楽では、必要に応じた回数を行なうとの回答が30~40%程度見受けられる。表1-25から、中学年も、低学年の場合と全く同様の傾向が示されている。さらに、表1-25の高学年でも、低・中学年と同様の傾向が見られるが、国語、図工、体育の3教科で、1時限に1回の割合がやや多くなっている。

以上のように、グループ学習の1時限内での回数は、どの教科においても、1回から2回という回答が多い。

表1-27~1-29は、各教科の1回のグループ学習の時間がどの程度であるかについて尋ねた結果を、低・中・高学年別に示したものである。その他の項の具体的内容は、グループ学習の頻度・回数の場合と同様に、適宜・

表 1-24 1時限内のグループ学習の回数 (低学年) [Q 8-(2)]

回数 教科	1回	2回	3回	4回	5回以上	その他
国語(N=66)	23 (34.8)	12 (18.2)	4 (6.1)	1 (1.5)	0	26 (39.4)
算数(N=66)	25 (37.9)	8 (12.1)	3 (4.5)	1 (1.5)	0	29 (43.9)
理科(N=65)	24 (36.9)	23 (35.4)	7 (10.8)	2 (3.1)	1 (1.5)	8 (12.3)
社会(N=66)	34 (51.5)	11 (16.7)	3 (4.5)	2 (3.0)	0	16 (24.2)
図工(N=64)	35 (54.7)	4 (6.3)	1 (1.6)	0	0	24 (37.5)
音楽(N=60)	28 (46.7)	6 (10.0)	6 (10.0)	1 (1.7)	1 (1.7)	18 (30.0)
体育(N=65)	21 (32.3)	16 (24.6)	9 (13.8)	4 (6.2)	0	15 (23.1)

表 1-25 1時限内のグループ学習の回数 (中学年) [Q 8-(2)]

回数 教科	1回	2回	3回	4回	5回以上	その他
国語(N=77)	31 (40.3)	11 (14.3)	5 (6.5)	0	0	30 (39.0)
算数(N=77)	22 (28.6)	19 (24.7)	4 (5.2)	0	0	32 (41.6)
理科(N=74)	18 (24.3)	30 (40.5)	10 (13.5)	3 (4.1)	4 (5.4)	9 (12.2)
社会(N=75)	33 (44.0)	18 (24.0)	8 (10.7)	2 (2.7)	0	14 (18.7)
図工(N=67)	32 (47.8)	4 (6.0)	2 (3.0)	0	0	29 (43.3)
音楽(N=55)	20 (36.4)	12 (21.8)	1 (1.8)	0	0	22 (40.0)
体育(N=73)	21 (28.8)	15 (20.5)	12 (16.4)	2 (2.7)	3 (4.1)	20 (27.4)

表 1-26 1 時限内のグループ学習の回数 (高学年) [Q 8-(2)]

回数 教科	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回以上	その他
国語(N=71)	46 (64.8)	10 (14.1)	3 (4.2)	0	0	12 (16.9)
算数(N=71)	28 (39.4)	15 (21.1)	5 (7.0)	0	0	23 (32.4)
理科(N=64)	20 (31.3)	25 (39.1)	14 (21.9)	1 (1.6)	0	4 (6.3)
社会(N=67)	37 (55.2)	16 (23.9)	8 (11.9)	1 (1.5)	0	5 (7.5)
図工(N=53)	32 (60.4)	1 (1.9)	2 (3.8)	0	0	18 (34.0)
音楽(N=29)	12 (41.4)	5 (17.2)	1 (3.4)	0	0	11 (37.9)
体育(N=61)	18 (29.5)	15 (24.6)	14 (23.0)	2 (3.3)	0	12 (19.7)
技家(N=37)	20 (54.1)	8 (21.6)	1 (2.7)	1 (2.7)	0	7 (18.9)

必要に応じて時間を決めるという回答が殆どであった。

表 1-27 から、低学年では、各教科とも 4~6 分、7~10 分、11~20 分の割合が多い。しかし、理科、社会、図工では、21 分以上とするものもそれぞれ 10~25% 程度見られ、他の教科よりも 1 回当たりのグループ学習の時間は長くなる傾向がある。また、適宜時間を決定するとい

う回答 (その他) も各教科で、かなりの割合 (約 10%~40%) を占めている。中学年 (表 1-28) も、低学年の割合と同様の傾向を示しているが、理科、社会、図工に加えて体育でも時間が長くなる傾向がみられる。また、表 1-29 から、高学年でも、低・中学年と類似した傾向となっている。高学年で新たに加わる技家は、11~20 分

表 1-27 1 回のグループ学習の時間 (低学年) [Q 8-(3)]

時間 教科	2~3 分	4~6 分	7~10 分	11~20 分	21 分以上	その他
国語(N=66)	2 (3.0)	16 (24.2)	14 (21.2)	7 (10.6)	1 (1.5)	26 (39.4)
算数(N=66)	3 (4.5)	11 (16.7)	15 (22.7)	7 (10.6)	1 (1.5)	29 (43.9)
理科(N=65)	1 (1.5)	10 (15.4)	17 (26.2)	21 (32.3)	8 (12.3)	8 (12.3)
社会(N=66)	1 (1.5)	12 (18.2)	12 (18.2)	17 (25.8)	7 (10.6)	17 (25.8)
図工(N=64)	1 (1.6)	1 (1.6)	9 (14.1)	10 (15.6)	16 (25.0)	27 (42.2)
音楽(N=60)	1 (1.7)	8 (13.3)	22 (36.7)	4 (6.7)	4 (6.7)	21 (35.0)
体育(N=65)	1 (1.5)	6 (9.2)	22 (33.8)	16 (24.6)	5 (7.7)	15 (23.1)

表 1-28 1 回のグループ学習の時間 (中学年) [Q 8-(3)]

時間 教科	2~3 分	4~6 分	7~10 分	11~20 分	21 分以上	その他
国語(N=77)	5 (6.5)	12 (15.6)	20 (26.0)	8 (10.4)	1 (1.3)	31 (40.3)
算数(N=77)	4 (5.2)	13 (16.9)	17 (22.1)	9 (11.7)	2 (2.6)	32 (41.6)
理科(N=74)	3 (4.1)	6 (8.1)	18 (24.3)	27 (36.5)	10 (13.5)	8 (13.5)
社会(N=75)	2 (2.7)	12 (16.0)	16 (21.3)	19 (25.3)	10 (13.3)	17 (22.3)
図工(N=67)	2 (3.0)	6 (9.0)	5 (7.5)	5 (7.5)	18 (26.9)	27 (46.3)
音楽(N=55)	0	7 (12.7)	15 (27.3)	8 (14.5)	2 (3.6)	21 (41.8)
体育(N=73)	2 (2.7)	4 (5.5)	15 (20.5)	20 (27.4)	12 (16.4)	15 (27.4)

表 1-29 1 回のグループ学習の時間 (高学年) [Q 8-(3)]

時間 教科	2~3 分	4~6 分	7~10 分	11~20 分	21 分以上	その他
国語(N=71)	4 (5.6)	12 (16.9)	26 (36.6)	12 (16.9)	3 (4.2)	14 (19.7)
算数(N=71)	2 (2.8)	13 (18.3)	14 (19.7)	18 (25.4)	1 (1.4)	23 (32.4)
理科(N=64)	2 (3.1)	5 (7.8)	19 (29.7)	18 (28.1)	16 (25.0)	4 (6.3)
社会(N=67)	2 (3.0)	8 (11.9)	22 (32.8)	21 (31.3)	9 (13.4)	5 (7.5)
図工(N=53)	1 (1.9)	8 (15.1)	3 (5.7)	4 (7.5)	16 (30.2)	21 (39.6)
音楽(N=29)	0	4 (13.8)	8 (27.6)	3 (10.3)	3 (10.3)	11 (27.9)
体育(N=61)	2 (3.3)	5 (8.2)	17 (27.9)	15 (24.6)	11 (18.0)	11 (18.0)
技家(N=37)	1 (2.7)	4 (10.8)	4 (10.8)	9 (24.3)	13 (35.1)	6 (16.2)

小・中学校における指導の調査的研究 I

ないしはそれ以上と答えたものが合わせて約60%と、1回当たりのグループ学習の時間は長い。

以上、1回のグループ学習の時間については、低・中・高学年とも、4～6分、7～10分、11～20分という回答が大部分を占めるが、理科、社会、図工、体育、技家では、21分以上の割合も多い。図工、技家などで21分以上が多いのは、2時限続きの授業である場合が多いことによるとも考えられる。

6) グループリーダーについて

グループ学習を行なう際に、そのグループに何らかのリーダーが存在するか否か、さらに、存在するとしたらどのように決めたのか、また、その役割は何かなど、グループリーダーの諸特徴についての質問結果を述べる。

表1-30は、学年別にみたグループリーダーの有無の割合を示している。どの学年でも、リーダーが存在する

表1-30 グループリーダーの有無〔Q9〕

学年	有・無	
	リーダー有	リーダー無
低学年(N=66)	48 (72.7)	18 (27.3)
中学年(N=77)	66 (85.7)	11 (14.3)
高学年(N=71)	68 (95.8)	3 (4.2)
計 (N=214)	182 (85.0)	32 (15.0)

場合が70%以上と多い。また、学年が上がるにつれて、この割合は増加し、高学年では96%と殆どの場合にリーダーが存在しているといえる。以上のように、低学年においても、リーダーの導入はかなりの割合で行なわれているといえる。

以下の、リーダーの決め方、交替の形式、役割についての3つの質問は、ここでリーダーがいると回答したもののについてのみを分析対象とした。

表1-31は、リーダーはどのようにして決めるかについて尋ねた結果である。低学年では、予め教師が決めるが33%と最も多く、次いで、予め生徒が決める(27%)となっている。しかしながら、中・高学年では、予め生徒が決めるとするものが50%近くとかなり増加し、次に、自然に生徒の中から決まると答えたものが多くなっている(27～28%)。したがって、高学年になるにつれて、リーダーの決定に際して、教師の介在が少なくなるといえる。

表1-32は、リーダーが固定制かそれとも持ち回り制であるのか、というリーダー交替の形式についての質問結果である。すべての学年で固定制をとる場合が最も多く(48～59%)、次いで、時に応じてリーダーはかわる(約30%)となっている。持ち回り制は、低学年で15%程度

表1-31 グループリーダーの決め方〔Q9-1〕

学年	決め方					
	予め生徒が決める	予め教師が決める	自然に生徒の中で決める	見計らって教師が決める	その他	
低学年(N=48)	13 (27.1)	16 (33.3)	7 (14.6)	3 (6.3)	9 (18.8)	
中学年(N=66)	31 (47.0)	11 (16.7)	18 (27.3)	1 (1.5)	5 (7.6)	
高学年(N=68)	33 (48.5)	12 (17.6)	19 (27.9)	1 (1.5)	3 (4.4)	
計 (N=182)	77 (42.3)	39 (21.4)	44 (24.2)	5 (2.7)	17 (9.3)	

表1-32 グループリーダー交替の形式〔Q9-2〕

学年	形式				
	固定制	持ち回り制	時に応じてかわる	その他	
低学年(N=48)	21 (41.8)	7 (14.6)	13 (27.1)	7 (14.6)	
中学年(N=66)	39 (59.1)	7 (10.6)	19 (28.8)	1 (1.5)	
高学年(N=68)	39 (57.4)	5 (7.4)	19 (27.9)	5 (7.4)	
計 (N=182)	99 (54.4)	19 (10.4)	51 (28.0)	13 (7.1)	

表1-33 グループリーダーの役割*〔Q9-3〕

学年	役割						
	司会	意見のまとめ	わからない子に教える	連絡	授業態度の監督	その他	
低学年(N=48)	20 (41.7)	37 (77.1)	29 (60.4)	21 (43.8)	10 (20.8)	1 (2.1)	
中学年(N=66)	35 (53.0)	60 (90.9)	38 (57.6)	25 (37.9)	6 (9.1)	1 (1.5)	
高学年(N=68)	32 (47.1)	64 (94.1)	34 (50.0)	18 (26.5)	10 (14.7)	0	
計 (N=182)	87 (47.8)	161 (88.5)	91 (50.0)	64 (35.2)	26 (14.3)	2 (1.1)	

*複数選択項目

みられるが、学年が上がるのに伴って減少している。このことから、一度決定されたリーダーは、あまり頻繁に交替することは少ないようである。

また、表1-33には、リーダーの役割としてはどのようなものが多いかについての回答結果が示されている。この表から、リーダーには、意見のまとめ、わからない子に教える、司会、連絡、が役割として課せられている場合が多いことがわかる。さらに、低学年では、グループの成員に対して、授業態度の監督をするという役割も果しているようである。

7) グループのまとまりについて

グループ学習を用いて授業を行なった場合における、グループ内の子どものまとまりの諸側面に関する質問結果を以下に示す。

表1-34は、グループ内の子どものまとまり具合についての回答結果である。どの学年でも、グループによ

てまとまり具合は異なるとするものが、75~80%と大半を占めている。ただ、どのグループもあまりまとまっていないう答はわずかであり、少なくとも、グループ学習によってまとまりの悪くなるようなことはないと思われる。

表1-35は、このようなまとまり具合をどのような観点から判断したのか、についての回答結果である。これによると、低・中・高学年とも、大部分が、グループ内の皆が協力して勉強すると答えており(77~90%)、グループ学習によって、グループ内の協調性が高まることがうかがえる。

グループを編成した時から、まとまりが見られるようになるまで、どの位の期間を要するか、という質問に対する結果が表1-36である。どの学年においても、およそ1週間から1ヶ月位の間で、殆どのグループがまとまってくるようである。1週間以内にまとまると答えたも

表1-34 グループのまとまり具合〔Q10-(1)〕

学年	程度 よく まとまっている	あまりまと まっていない	グループに よって違う	その他
低学年(N=66)	13 (19.7)	1 (1.5)	50 (75.8)	2 (3.0)
中学年(N=77)	11 (14.3)	2 (2.6)	61 (79.2)	3 (3.9)
高学年(N=71)	12 (16.9)	1 (1.4)	57 (80.3)	1 (1.4)
計 (N=214)	36 (16.8)	4 (1.9)	168 (78.5)	6 (2.8)

表1-35 グループのまとまりの評価基準〔Q10-(2)〕

学年	基準 授業態度が よい	協力して 勉強する	皆の仲がよい	その他
低学年(N=66)	7 (10.6)	51 (77.3)	24 (36.4)	4 (6.1)
中学年(N=77)	10 (13.0)	69 (89.6)	12 (15.6)	4 (5.2)
高学年(N=71)	7 (9.9)	61 (85.9)	18 (25.4)	3 (4.2)
計 (N=214)	24 (11.2)	181 (84.6)	54 (25.2)	11 (5.1)

表1-36 グループのまとまるまでの期間〔Q10-(3)〕

学年	期間 1週間以内	1週間位	2週間位	3週間位	1ヶ月位	2ヶ月位	3ヶ月以上	無答
低学年(N=66)	16 (24.2)	13 (19.7)	9 (13.6)	9 (13.6)	10 (15.2)	1 (1.5)	1 (1.5)	7 (10.6)
中学年(N=77)	21 (27.3)	15 (19.5)	18 (23.4)	7 (9.1)	6 (7.8)	3 (3.9)	2 (2.6)	5 (6.5)
高学年(N=71)	10 (14.1)	13 (18.3)	23 (32.4)	6 (8.5)	11 (15.5)	2 (2.8)	2 (2.8)	4 (5.6)
計 (N=214)	47 (22.0)	41 (19.2)	50 (23.4)	22 (10.3)	27 (12.6)	6 (2.8)	5 (2.3)	16 (7.5)

表1-37 グループ間の関係〔Q10-(4)〕

学年	関係	競争的	協同的	どちらとも いえない	無答
低学年(N=66)		15 (22.7)	12 (18.2)	36 (54.5)	3 (4.5)
中学年(N=77)		15 (19.5)	24 (31.2)	36 (46.8)	2 (2.6)
高学年(N=71)		13 (18.3)	21 (29.6)	37 (52.1)	0
計 (N=214)		43 (20.1)	57 (26.6)	109 (50.9)	5 (2.3)

表 1-38 グループ学習結果の発表方法〔Q11〕

方法 学年	討論・学習 の直後	授業の終り	適宜	特別な時間を 設ける	発表はしない	その他
低学年(N=66)	21 (31.8)	3 (4.5)	34 (51.5)	0	1 (1.5)	7 (10.6)
中学年(N=77)	20 (26.0)	3 (3.9)	40 (51.9)	1 (1.3)	1 (1.3)	12 (15.6)
高学年(N=71)	22 (31.0)	4 (5.6)	35 (49.3)	3 (4.2)	0	7 (9.9)
計 (N=214)	63 (29.4)	10 (4.7)	109 (50.9)	4 (1.9)	2 (0.9)	26 (12.1)

表 1-39 グループ学習の評価方法〔Q12〕

評価 学年	グループの 成績重視	グループへの 参加度重視	個々人の 成績重視	その他
低学年(N=66)	3 (4.5)	47 (71.2)	10(15.2)	6 (9.1)
中学年(N=77)	10 (13.0)	55 (71.4)	8(10.4)	4 (5.2)
高学年(N=71)	7 (9.9)	53 (74.6)	8(11.3)	3 (4.2)
計 (N=214)	20 (9.3)	155 (72.4)	26(12.1)	13 (6.1)

のも14~27%みられるが、これは高学年よりも低・中学年の方が高い割合を示しており、興味深い。

表1-37には、学級内のグループ相互の関係について競争的か、協同的かを尋ねた結果が示されている。どちらともいえないという回答が、各学年の約半数を占めており、いずれか特定できない場合が多いようである。しかし、これを除けば、低学年では競争的であったものが、高学年になるにつれて、協同的なグループ間関係が生まれてくるようになる傾向がみられる。

8) グループ学習結果の発表方法

グループによる討論あるいは学習の結果を学級全体にいつ発表させるかについて、回答を求めた結果を表1-38に示す。適宜・必要に応じて発表させるという回答が、すべての学年で約50%と最も高い割合になっている。これは、一定の発表方法が予め決められているわけではないことを示している。しかし、グループによる討論・学習の直後に行なうとする回答も、各学年、それぞれ1/3程度見られる。発表はさせないという答は非常に少なく、特別な時間は設けなくとも、何らかの形で、グループ学習の結果を発表させているようである。

9) グループ学習の評価方法

表1-39は、グループによる学習の成績を評価する場合、どのような点を重視するかについて尋ねた結果である。これによると、低・中・高学年とも、個々の成員のグループへの参加の割合を重視する傾向が強く、70%前後を占めている。したがって、グループ学習においては、グループ全体あるいは個々人の成績というよりも、各成員がグループ学習に積極的に参加したか否かを、評価の観点として重視していることがうかがえる。

III-2 中学校の学習指導

1 学習指導形態に関する調査

1) 現在用いられている学習指導形態

表2-2は、過去1年間(1978年度)に受け持った授業の中で、どのような学習形態を重視して用いたかについて回答を求めた結果を、各教科ごとに示したものである。ここでの一斉学習とは、学級全員を対象として同一内容を同時に指導する形態、グループ学習とは、学習を分団または小グループに分けて指導する形態、個別学習とは、生徒一人一人を対象にして指導する形態である、と定義して質問を行なった。

表2-2から明らかのように、いずれの教科においても一斉学習及び一斉学習を含む複合形態を用いる割合が多くみられる。しかし、一斉を含む4種の学習形態(一斉、一斉・グループ、一斉・個別、一斉・グループ・個別)のいずれを多く用いているかは、教科によってかなり異なっている。国語・数学・英語・音楽の4教科では、これらの学習形態のそれぞれが比較的高い割合で用いられている(13~40%)。理科、社会では、一斉・グループ学習がそれぞれ63%、47%と過半数もしくはそれ以上の選択率を示しており、注目される。また、保体、技家は一斉・グループ学習、一斉・グループ・個別学習の割合が高い。とくに、後者の3つの複合形態を用いる割合はともに50%以上と高率になっている。

以上のように、各教科とも、一斉及びそれを含む複合形態を用いる割合は多い。これは、一斉学習の内容が、学級全員を対象とした説明・解説・講義・まとめであり、どの教科においても、授業の展開上、必要不可欠であるためと考えられる。また、中学校では、グループ学習、

資 料

表 2-2 学習指導形態の内訳〔Q1-1〕

形態 教科	一斉学習	グループ学習	個別学習	一斉とグループ 学習	グループと 個別学習	一斉と個別 学習	一斉とグループ と個別学習	その他
国語(N=48)	9 (18.8)	0	1 (2.1)	15 (31.3)	1 (2.1)	13 (27.1)	9 (18.8)	0
数学(N=52)	14 (26.9)	0	0	8 (15.4)	0	21 (40.0)	7 (13.5)	2 (3.8)
理科(N=56)	4 (7.1)	4 (7.1)	0	35 (62.5)	1 (1.8)	1 (1.8)	8 (14.3)	3 (5.4)
社会(N=51)	12 (23.5)	1 (2.0)	0	24 (47.1)	0	3 (5.9)	7 (13.7)	4 (7.8)
英語(N=48)	9 (18.8)	1 (2.1)	0	9 (18.8)	0	17 (35.4)	11 (22.9)	1 (2.1)
美術(N=15)	1 (6.7)	1 (6.7)	2 (13.3)	0	1 (6.7)	6 (40.0)	4 (26.7)	0
音楽(N=15)	2 (13.3)	0	0	4 (26.7)	0	3 (20.0)	5 (33.3)	1 (6.7)
保体(N=16)	0	2 (12.5)	0	6 (37.5)	0	0	8 (50.0)	0
技家(N=15)	1 (6.7)	1 (6.7)	0	5 (33.3)	0	0	8 (53.8)	0
計(N=316)	52 (16.5)	10 (3.2)	3 (0.9)	106 (33.5)	3 (0.9)	64 (20.3)	67 (21.2)	11 (3.5)

表 2-3 学習指導形態を用いる理由*〔Q1-2〕

理由 (内項目番号)	学習指導形態	一斉学習 (N=52)	グループ学習 (N=10)	個別学習 (N=3)	一斉・グループ 学習 (N=106)	グループ・個別 学習 (N=3)	一斉・個別 学習 (N=64)	一斉・グループ・ 個別学習 (N=67)
授業内容の理解に有効 (5)		22 (42.3)	0	0	29 (27.4)	0	26 (40.6)	26 (38.8)
知識の定着をはかる (11)		5 (9.6)	2 (20.0)	0	23 (21.7)	0	11 (17.1)	17 (24.5)
学力の向上をはかる (19)		10 (19.2)	2 (20.0)	0	9 (8.5)	0	7 (10.9)	6 (9.0)
落ちこぼれをふせぐ (2)		2 (3.8)	2 (20.0)	2 (66.7)	19 (17.9)	2 (66.7)	25 (39.1)	29 (43.3)
能力・適性に応ずる (10)		0	2 (20.0)	2 (66.7)	10 (9.4)	2 (66.7)	31 (48.4)	38 (56.7)
能力差をなくす (15)		1 (1.9)	0	0	4 (3.8)	0	4 (6.3)	7 (10.4)
劣等感・疎外感を減ずる (18)		1 (1.9)	0	1 (33.3)	4 (3.8)	0	4 (6.3)	3 (4.5)
人間関係・仲間意識の育成 (6)		0	3 (30.0)	0	25 (23.6)	1 (33.3)	1 (1.6)	17 (25.4)
競争をさける (8)		1 (1.9)	1 (10.0)	2 (66.7)	1 (0.9)	1 (33.3)	6 (9.4)	4 (6.0)
協調性を育てる (14)		1 (1.9)	2 (20.0)	2 (66.7)	25 (23.6)	3 (100.0)	6 (9.4)	15 (22.4)
効果的な相互交渉 (4)		0	2 (20.0)	0	16 (15.1)	1 (33.3)	1 (1.6)	8 (11.9)
競争心の活用 (21)		2 (3.8)	3 (30.0)	0	3 (2.8)	0	0	6 (9.0)
討論による思考の深化 (17)		4 (7.7)	5 (50.0)	1 (33.3)	44 (41.5)	1 (33.3)	5 (7.8)	26 (38.8)
相互批判の場として (22)		0	0	0	7 (6.6)	0	1 (1.6)	5 (7.5)
グループ意識の育成 (12)		0	5 (50.0)	0	27 (25.5)	0	0	6 (9.0)
学習の満足度を高める (13)		0	0	0	6 (5.7)	1 (33.3)	4 (6.3)	6 (9.0)
学習の参加度を高める (16)		5 (9.6)	8 (80.0)	0	55 (51.9)	1 (33.3)	7 (10.9)	25 (37.3)
主体性を育てる (20)		2 (3.8)	3 (30.0)	0	23 (21.7)	0	3 (4.7)	22 (32.8)
教材・器具の都合上 (1)		13 (25.0)	5 (50.0)	0	26 (24.5)	0	5 (7.8)	10 (14.9)
授業のスムーズな進行 (3)		34 (65.4)	1 (10.0)	0	32 (30.2)	0	19 (29.7)	8 (11.9)
授業計画が容易 (7)		20 (38.5)	1 (10.0)	2 (66.7)	9 (8.5)	1 (33.3)	17 (26.6)	5 (7.5)
教師の臨機応変な対処が可能 (9)		18 (34.6)	0	0	10 (9.4)	0	11 (17.2)	3 (4.5)
その他 (23・24)		2 (3.8)	0	1 (33.3)	3 (2.8)	1 (33.3)	2 (3.1)	0

*複数選択項目

個別学習、グループ・個別学習は、各教科ともあまり用いられていないようである。

前問における、授業で重視して用いた学習形態について、それぞれの選択理由を尋ねた結果が表 2-3 である。ここでは、担当教科を込みにして、その頻度と割合を示した。

一斉学習では、授業内容の理解に有効である (42%) という理由の他、授業のスムーズな進行 (65%)、授業計画が容易 (39%)、教師の臨機応変な対処が可能 (35%)

といった授業の進行上の都合を多くあげている。グループ学習では、討論による思考の深化 (50%)、グループ意識の育成 (50%)、学習の参加度を高める (80%) というようなグループ活動における生徒同士の相互作用から生まれる効果が理由として多くあがっている。また、教材・器具の都合上でグループ学習を用いることも多いようである (50%)。さらに、個別学習では、対象者数が少ないため、明確ではないが、前述の 2 つの学習形態と比較して、落ちこぼれをふせぐ、能力・適性に応じた指導がで

小・中学校における指導の調査的研究 I

きる、という理由が多いようである。一斉学習、グループ学習、個別学習が組み合わせられ、複合形態の学習が用いられる際には、一般に、その理由についても、上述したそれぞれの理由が加算的にあげられることが多い。

表 2-4 一時間の授業の流れのパターン* [Q 2]

教科	授業のパターン	頻度 (%)
国語 (N=48)	C→I→C	21 (43.8)
	C→I→G→C	18 (37.5)
	C→G→C	13 (27.1)
	C	13 (27.1)
数学 (N=52)	C→I→C	31 (59.6)
	C→I→G→C	16 (30.8)
	C→G→I→C	12 (23.1)
	C→G→C	8 (15.4)
理科 (N=56)	C→G→C	31 (55.4)
	C→I→C	16 (28.6)
	C→I→G→C	13 (23.2)
	C→G→I→C	13 (23.2)
	C	13 (23.2)
社会 (N=51)	C→G→C	21 (41.2)
	C	19 (37.3)
	C→I→C	8 (15.7)
英語 (N=48)	C→I→C	16 (33.3)
	C→G→I→C	11 (22.9)
	C→I→G→C	8 (16.7)
美術 (N=15)	C→I	5 (33.3)
	C→I→C	3 (20.0)
	C→G→I→C	3 (20.0)
音楽 (N=15)	C→G→C	9 (60.0)
	C→I→C	6 (40.0)
	C→I→G→C	5 (33.3)
保健 (N=16)	C→I→C	5 (31.3)
	C→G→C	5 (31.3)
	C→G→I→C	4 (25.0)
技家 (N=15)	C→G→I→C	4 (26.7)
	C→G→C	3 (20.0)
	G→I→C	3 (20.0)

* 複数回答項目
Cは一斉学習, Gはグループ学習, Iは個別学習を示す

これらのことから、大まかに述べるならば、授業のやりやすさという点では一斉学習、学級内の人間関係、学習に対する意欲を高めるという点ではグループ学習、また、生徒の能力に合わせた指導のためには個別学習が適していると考えられているようである。

通常の1時限の授業時間において、最も頻繁に行なわれた授業の流れ(展開)を、そこで用いられた一斉(C)、グループ(G)、個別(I)という学習指導形態によって表わすことを求めた結果が表2-4である。ここでは、各教科において、比較的頻度の高い授業パターンを表中に示した。

この結果から、1時限の流れを導入-展開-まとめ、と3つの部分に大別できるとするならば、どの教科においても、導入部及びまとめでは一斉学習が用いられ、展開部ではグループ学習、個別学習あるいはその両方を行なわれているということができよう。1時限の初めから終わりまで一斉学習を用いる(C)とするものを除けば表中で、上述のパターンにあてはまらないのは、美術のC→I(33%)、技家のG→I→C(20%)のみである。美術の場合、展開部以降は個人製作になることが多いことから、こうしたパターンになると思われる。技家では、グループ製作などが行なわれることから、G→I→Cといった流れが用いられると思われる。いずれにしろ、教科の特殊性を示すものであるといえる。

2) 学習指導形態別にみた学級の諸特徴

表2-5～2-9は、それぞれの教師が重視して用いたと答えた学習指導形態のもとでの、学級における生徒のまとめり具合(表2-5)、カリキュラムの進行の程度(表2-6)、授業への生徒の参加の度合(表2-7)、生徒の学力の向上度(表2-8)、生徒の意見発表の程度(表2-9)について尋ねた結果である。なお、これらの表では、教科を込みにした頻度(%)を示した。

表2-5は、学級全体の生徒のまとめり具合がどのようであるかについて尋ねたものである。これによると、いずれの指導形態においても、非常にまとまっている、まとまっているを合わせると67～100%となり、どの指

表 2-5 学級のまとめり具合 [Q 3-(1)]

指導形態	程度					
	非常にまとまっている	まとまっている	あまりまとまっていない	まとまっていない	無答	
一斉学習(N=52)	4 (7.7)	31 (59.6)	13 (25.0)	3 (5.7)	1 (1.9)	
グループ学習(N=10)	2 (20.0)	5 (50.0)	2 (20.0)	0	1 (10.0)	
個別学習(N=3)	1 (33.3)	2 (66.7)	0	0	0	
一斉・グループ学習(N=106)	10 (9.4)	79 (74.5)	10 (9.4)	0	7 (6.6)	
グループ・個別学習(N=3)	0	3 (100.0)	0	0	0	
一斉・個別学習(N=64)	9 (14.1)	44 (68.8)	6 (9.4)	3 (4.7)	2 (3.1)	
一斉・グループ・個別学習(N=67)	7 (10.4)	45 (67.2)	11 (16.4)	1 (1.5)	3 (4.5)	

導形態においても、かなりまとまっているといえる。ただ、一斉学習で、あまりまとまっていない、まとまっていないと回答したものが30%以上みられるのは問題であろう。

表2-6は、それぞれの学習指導形態のもとで、カリキュラムが予定どおり進行したかどうかを尋ねた結果である。グループ・個別学習を除いた他の指導形態では、予定どおり進行、ある程度進行したと答えた教師が、合わせて80%以上となっており、カリキュラムのおおよその完了をみているようである。グループ・個別学習の場合、あまり進行せず33%と割合は高いが、対象者数が3と少なく、他の形態に比べてカリキュラムの進行が悪いかな否かは判断できない。また、個別学習では、すべての教師（3名）が、ある程度進行したと答えているのは興味深い。

また、各学習指導形態のもとでの生徒の授業への取り組み具合について尋ねた結果が表2-7に示されている。

この表によると、一斉学習を除く他の指導形態では、かなり積極的であると答えている割合が多く、非常に積極的であるという回答を合わせると、いずれも過半数をこえるに至っている。一斉学習では、あまり積極的ではない、消極的を合わせると60%以上の高率となり、他の指導形態とは著しく異なっている。このことが、一斉学習という方法自体に由来するとするならば、今後、生徒の授業への積極性を促すための、何らかの授業改善が必要であると思われる。

表2-8は、重視して用いたそれぞれの指導形態の下で、生徒の学力はどの程度伸びたかについて回答を求めた結果である。一斉学習ではよくできる子が伸びるとするものが最も多く（39%）、一斉・グループ学習では、あまり変化なしが最も多い（30%）、これ以外の他の指導形態では、できる・できないを問わず全体的に伸びるといふ回答が多くなっている（30~67%、ただし、グループ学習では、よくできる子が伸びると同率）、一斉学習にお

表2-6 カリキュラムの進行度〔Q3-2〕

指導形態	程度	予定どおり進行	ある程度進行	あまり進行せず	残った	無答
一 斉 学 習(N= 52)		22 (42.3)	20 (38.5)	9 (17.3)	1 (1.9)	0
グ ル ー プ 学 習(N= 10)		2 (20.0)	7 (70.0)	0	1 (10.0)	0
個 別 学 習(N= 3)		0	3 (100.0)	0	0	0
一 斉・グ ル ー プ 学 習(N=106)		44 (41.5)	46 (43.4)	13 (12.3)	1 (0.9)	2 (1.9)
グ ル ー プ・個 別 学 習(N= 3)		2 (66.7)	0	1 (33.3)	0	0
一 斉・個 別 学 習(N= 64)		40 (62.5)	22 (34.4)	1 (1.6)	1 (1.6)	0
一 斉・グ ル ー プ・個 別 学 習(N= 67)		27 (40.3)	29 (43.3)	8 (11.9)	1 (1.5)	2 (3.0)

表2-7 授業への生徒の参加度〔Q3-3〕

指導形態	程度	非常に積極的	かなり積極的	あまり積極的ではない	消極的	無答
一 斉 学 習(N= 52)		0	18 (34.6)	30 (57.7)	3 (5.8)	1 (1.9)
グ ル ー プ 学 習(N= 10)		0	8 (80.0)	2 (20.0)	0	0
個 別 学 習(N= 3)		1 (33.3)	1 (33.3)	1 (33.3)	0	0
一 斉・グ ル ー プ 学 習(N=106)		0	63 (59.4)	35 (33.0)	4 (3.8)	4 (3.8)
グ ル ー プ・個 別 学 習(N= 3)		0	2 (66.7)	1 (33.3)	0	0
一 斉・個 別 学 習(N= 64)		5 (7.8)	39 (60.9)	18 (28.1)	1 (1.6)	1 (1.6)
一 斉・グ ル ー プ・個 別 学 習(N= 67)		6 (9.0)	46 (68.7)	11 (16.4)	0	4 (6.0)

表2-8 学力の向上度〔Q3-4〕

指導形態	程度	全体的にのびる	よくできる子がのびる	あまりできない子がのびる	あまり変化なし	無答
一 斉 学 習(N= 52)		14 (26.9)	20 (38.5)	5 (9.6)	13 (25.0)	0
グ ル ー プ 学 習(N= 10)		3 (30.0)	3 (30.0)	2 (20.0)	1 (10.0)	1 (10.0)
個 別 学 習(N= 3)		2 (66.7)	1 (33.3)	0	0	0
一 斉・グ ル ー プ 学 習(N=106)		20 (18.9)	26 (24.5)	20 (18.9)	32 (30.2)	8 (7.5)
グ ル ー プ・個 別 学 習(N= 3)		2 (66.7)	0	1 (33.3)	0	0
一 斉・個 別 学 習(N= 64)		26 (40.6)	11 (17.2)	11 (17.2)	12 (18.8)	4 (6.3)
一 斉・グ ル ー プ・個 別 学 習(N= 67)		29 (43.3)	8 (11.9)	17 (25.4)	9 (13.4)	4 (6.0)

小・中学校における指導の調査的研究 I

表 2-9 生徒の意見発表の程度〔Q3-(5)〕

指導形態	程度	述べられる 子が多い	半々ぐらい	述べられない 子が多い	無答
一 斉 学 習 (N= 52)		8 (15.4)	28 (53.8)	15 (28.8)	1 (1.9)
グ ル ー プ 学 習 (N= 10)		4 (40.0)	6 (60.0)	0	0
個 別 学 習 (N= 3)		2 (66.7)	0	1 (33.3)	0
一 斉・グ ル ー プ 学 習 (N=106)		17 (16.0)	63 (59.4)	23 (21.7)	3 (2.8)
グ ル ー プ・個 別 学 習 (N= 3)		1 (33.3)	2 (66.7)	0	0
一 斉・個 別 学 習 (N= 64)		7 (10.9)	42 (65.6)	14 (21.9)	1 (1.6)
一 斉・グ ル ー プ・個 別 学 習 (N= 67)		17 (25.4)	39 (58.2)	10 (14.9)	1 (1.5)

ける学力の向上の偏りについては、一般的な評価と一致している結果を示しており、やはり何らかの改善策を講ずる必要があろう。

各々の学習指導形態のもとで、生徒が自分の意見をはっきり述べる事ができたかどうかについて尋ねた結果を、表 2-9 に示す。個別学習を除いて、他の指導形態では、はっきり述べられる子と述べられない子が半々ぐらいであるという回答が過半数を占めている(54~67%)。個別学習では、述べられる子が多いという回答が67%(頻度 2)、述べられない子が多いという回答が33%(頻度 1)と、評価が分かれている。対象者人数が少ないため、一般的傾向であるかどうかは明確ではないが、個別学習を

用いた場合には、クラスによって差があるものとも考えられる。また、一斉学習を含む 4 つの指導形態(一斉学習、一斉・グループ学習、一斉・個別学習、一斉・グループ・個別学習)でも、述べられない子が多いとの回答が15~29%と比較的割合が高いのも注目される。

以上、各学習指導形態の授業の諸側面に対する効果についてみてきたわけであるが、いくつかの側面で、一斉学習ないしは一斉学習を含む指導形態において、やや否定的な見解が多いように見受けられる。先にも述べたように、こうした点が、学習指導形態のみに起因するとは思われないが、今後、何らかの指導改善の方途を考えねばならないであろう。

表 2-10 関心のある学習指導形態*〔Q4〕

形態 教科	一斉学習	グループ学習	個別学習	能力別学習	発見学習	系統学習	問題解決学習
国語(N=48)	21 (43.8)	21 (43.8)	16 (33.3)	9 (18.8)	4 (8.3)	4 (8.3)	9 (18.8)
数学(N=52)	18 (34.6)	12 (23.1)	14 (26.9)	7 (13.5)	8 (15.4)	3 (5.8)	7 (13.5)
理科(N=56)	19 (33.9)	20 (35.7)	14 (25.0)	10 (17.9)	9 (16.1)	1 (1.8)	20 (35.7)
社会(N=51)	13 (25.5)	21 (41.2)	6 (11.8)	4 (7.8)	5 (9.8)	5 (9.8)	21 (41.2)
英語(N=48)	16 (33.3)	13 (27.1)	13 (27.1)	15 (31.3)	3 (6.3)	1 (2.1)	0
美術(N=15)	7 (46.7)	3 (20.0)	8 (53.3)	1 (6.7)	1 (6.7)	1 (6.7)	0
音楽(N=15)	9 (60.0)	10 (66.7)	9 (60.0)	3 (20.0)	0	0	0
保体(N=16)	4 (25.0)	9 (56.3)	4 (25.0)	6 (37.5)	3 (18.8)	2 (12.5)	4 (25.0)
技家(N=15)	3 (20.0)	5 (33.3)	2 (13.3)	1 (6.7)	4 (26.7)	0	4 (26.7)
計 (N=316)	110 (35.1)	114 (36.4)	86 (27.5)	56 (17.9)	37 (11.8)	17 (5.4)	65 (20.8)

*複数選択項目

仮説実験学習	プログラム学習	視聴覚学習	主体的学習	その他
0	1 (2.1)	7 (14.6)	0	0
1 (1.9)	8 (15.4)	10 (19.2)	7 (13.5)	1 (1.9)
12 (21.4)	7 (12.5)	19 (33.9)	7 (12.5)	1 (1.8)
2 (3.9)	1 (2.0)	18 (35.3)	6 (11.8)	1 (2.0)
1 (2.1)	8 (16.7)	20 (41.7)	11 (22.9)	0
0	1 (6.7)	7 (46.7)	4 (26.7)	0
0	1 (6.7)	5 (33.3)	3 (20.0)	0
0	2 (12.5)	5 (31.3)	3 (18.8)	1 (6.3)
3 (20.0)	1 (6.7)	4 (26.7)	5 (33.3)	0
19 (6.1)	30 (9.6)	95 (30.4)	46 (14.7)	4 (1.3)

3) 関心のある学習指導形態

ここでは、先の「現在用いている学習指導形態」とは別に、今後の授業の中で取り入れたいと思う学習指導形態について質問を行なった。選択肢には、一斉、グループ、個別学習といった指導形態に加えて、発見学習、プログラム学習などのより具体的な指導方法も入れられている。担当教科別にみた結果を表2-10に示す。

いずれの教科でも、一斉学習、グループ学習、個別学習は比較的高い割合で選択されている。特に、国語、美術、音楽における一斉学習、国語、社会、音楽、保体におけるグループ学習、美術、音楽における個別学習、の選択率はすべて40%以上と高い割合になっている。また英語、保体では能力別学習(それぞれ31, 38%)に対する関心も高い。具体的な指導方法についてみると、視聴覚学習の割合が各教科とも15%以上の選択率(英語、美術では40%以上)となっており、教育機器を活用した指導法に対する関心が高いことを示している。また、理科、社会における問題解決学習(それぞれ36, 41%)、技家における主体的学習(33%)なども比較的多く選択されているようである。

2 グループによる学習指導形態に関する調査

1) 分析対象者の内訳

質問5(Q5)以降は、過去1年間に、何らかの形でグループ学習を用いた指導を行なったことのある教師のみを対象にして回答を求めている。表2-11は、その対象者の内訳であり、これに該当する者の全対象者に対する割合を、対象人数欄の()内に示した。

2) グループ構成について

グループ学習を行なう際のグループ構成人数についての回答結果を表2-12に示す。構成人数は、英語と音楽を除いて、5~7人グループとするものが最も多くみられる(50~80%)。英語では、3~4人グループ(53%)、音楽では8~10人グループ(69%)が最も多くなっており特徴的である。さらに、一般的に述べるならば、主要5教科及び技家では3~7人のグループを、また、残りの美術、音楽、保体では5~10人のグループを用いることが多いといえよう。なお、その他という選択肢については、各教科とも高い割合ではないが、内容は適宜、人数を変えらるというものが大部分であった。

表2-11 グループ学習に関する質問・対象者内訳

教科	対象人数	教職経験年数					性別	
		5年未満	5~14年	15~24年	25年以上	無答	男	女
国語	44 (91.7)	7 (15.9)	13 (29.5)	16 (36.4)	8 (18.2)	0	30 (68.2)	14 (31.8)
数学	40 (76.9)	7 (17.5)	20 (50.0)	8 (20.0)	5 (12.5)	0	35 (87.5)	5 (12.5)
理科	54 (96.4)	6 (11.1)	19 (35.2)	25 (46.3)	4 (7.4)	0	49 (90.7)	5 (9.3)
社会	43 (84.3)	6 (14.0)	11 (25.6)	20 (46.5)	6 (14.0)	0	42 (97.7)	1 (2.3)
英語	32 (66.7)	6 (18.8)	15 (46.9)	7 (21.9)	4 (12.5)	0	21 (65.6)	1 (3.4)
美術	8 (53.3)	2 (25.0)	1 (12.5)	5 (62.5)	0	0	6 (75.0)	2 (25.0)
音楽	13 (86.7)	4 (30.8)	3 (23.1)	5 (38.5)	1 (7.7)	0	2 (15.4)	11 (84.6)
保体	16 (100.0)	2 (12.5)	5 (31.3)	6 (37.5)	1 (6.3)	2 (12.5)	7 (43.8)	9 (56.3)
技家	15 (100.0)	3 (20.0)	5 (33.3)	4 (26.7)	3 (20.0)	0	6 (40.0)	9 (60.0)
計	265 (83.9)	43 (16.2)	92 (34.7)	96 (36.2)	32 (12.1)	2 (0.8)	198 (74.7)	67 (25.3)

表2-12 グループの構成人数 [Q5-(1)]

教科	人数	2人	3~4人	5~7人	8~10人	その他
国語(N=44)	0	8 (18.2)	35 (79.5)	1 (2.3)	0	
数学(N=40)	1 (2.5)	11 (27.5)	28 (70.0)	0	0	
理科(N=54)	0	22 (40.7)	30 (55.6)	1 (1.9)	1 (1.9)	
社会(N=43)	0	11 (25.6)	31 (72.1)	1 (2.3)	0	
英語(N=32)	1 (3.1)	17 (53.1)	12 (37.5)	1 (3.1)	1 (3.1)	
美術(N=8)	0	1 (12.5)	4 (50.0)	2 (25.0)	1 (12.5)	
音楽(N=13)	0	0	3 (23.1)	9 (69.2)	1 (7.7)	
保体(N=16)	0	0	10 (62.5)	5 (31.3)	1 (6.3)	
技家(N=15)	0	5 (33.3)	10 (66.7)	0	0	
計(N=265)	2 (0.8)	78 (29.4)	169 (63.8)	12 (4.5)	5 (1.9)	

小・中学校における指導の調査的研究 I

表 2-13は、グループの性構成をどのように行なうかについて尋ねた結果を示したものである。保体、技家を除いて、大部分が男女混合の構成となっている。ただ、理科では、男女別々の構成になっている割合も41%と多い。これは、特別教室の使用時などに、男女別々のグループ構成を行なうためであろうと考えられる。また、保体、技家では、男女別々の構成が殆どであるが、中学校では、男女によって授業内容が異なっている場合が多く当然の結果ともいえるであろう。

3) グループ編成について

表 2-14は、グループ編成の主体が誰であるかについての質問結果である。教科によってその相対的な割合の程度は異なるが、全般的に、教師あるいは教師と生徒の相談によって決めるという回答が多い。美術を除く他の教科では、この2つの選択肢を合わせるとほぼ全体の3/4以上の割合となっている。ただ、数学、理科、英語、技家では教師が編成する機会が多く、国語、社会、音楽、保体では、教師と生徒が相談の上編成する機会が多い。

表 2-13 グループの性構成〔Q5-(2)〕

教科	性構成		
	男女別々	男女混合	その他および無答
国語(N=44)	3 (6.8)	40 (93.0)	1 (2.2)
数学(N=40)	6 (15.0)	34 (85.0)	0
理科(N=54)	22 (40.7)	30 (55.6)	2 (3.8)
社会(N=43)	4 (9.3)	39 (90.7)	0
英語(N=32)	5 (15.6)	27 (84.4)	0
美術(N=8)	1 (12.5)	7 (87.5)	0
音楽(N=13)	3 (23.1)	9 (69.2)	1 (7.7)
保体(N=16)	13 (81.3)	2 (12.5)	1 (6.3)
技家(N=15)	15 (100.0)	0	0
計(N=265)	72 (27.2)	188 (70.9)	5 (1.9)

表 2-14 グループの編成者〔Q6-(1)〕

教科	編成者			
	教師が編成	生徒が編成	教師・生徒の相談で編成	その他
国語(N=44)	13 (29.5)	3 (6.8)	24 (54.5)	4 (9.2)
数学(N=40)	18 (45.0)	7 (17.5)	13 (32.5)	2 (5.0)
理科(N=54)	27 (50.0)	9 (16.7)	16 (29.6)	2 (3.7)
社会(N=43)	8 (18.6)	6 (14.0)	21 (48.8)	8 (18.6)
英語(N=32)	18 (56.3)	2 (6.3)	9 (28.1)	3 (9.4)
美術(N=8)	1 (12.5)	2 (25.0)	2 (25.0)	3 (37.5)
音楽(N=13)	4 (30.8)	2 (15.4)	6 (46.2)	1 (7.7)
保体(N=16)	4 (25.0)	2 (12.5)	6 (37.5)	4 (25.0)
技家(N=15)	8 (53.3)	0	6 (40.0)	1 (6.7)
計(N=265)	101 (38.1)	33 (12.5)	103 (38.9)	28 (10.6)

表 2-15 グループ編成の基準*〔Q6-(2)〕

教科	基準							
	ソシオメトリックテストを使用	名簿順	能力別	能力・成績でグループ間等質	先にリーダーを決める	好きなもの同士	くじ	その他
国語(N=44)	4 (9.1)	1 (2.3)	1 (2.3)	22 (50.0)	25 (56.8)	3 (6.8)	4 (9.1)	8 (18.2)
数学(N=40)	4 (10.0)	40 (100.0)	4 (10.0)	21 (52.5)	19 (47.5)	3 (7.5)	4 (10.0)	4 (10.0)
理科(N=54)	2 (3.8)	14 (25.9)	2 (3.8)	22 (51.9)	21 (38.9)	3 (5.6)	8 (14.9)	1 (1.9)
社会(N=43)	4 (9.3)	2 (4.7)	0	16 (37.2)	26 (60.5)	6 (14.0)	3 (7.0)	4 (9.3)
英語(N=32)	3 (9.4)	2 (6.3)	2 (6.3)	12 (37.5)	12 (37.5)	2 (6.3)	0	6 (18.8)
美術(N=8)	0	1 (12.5)	0	1 (12.5)	3 (37.5)	3 (37.5)	0	1 (12.5)
音楽(N=13)	0	5 (38.5)	0	6 (46.2)	5 (38.5)	2 (15.4)	2 (15.4)	0
保体(N=16)	0	5 (31.3)	3 (18.8)	12 (75.0)	9 (56.3)	4 (25.0)	0	0
技家(N=15)	0	6 (40.0)	0	8 (53.3)	6 (40.0)	2 (13.3)	2 (13.3)	0
計(N=265)	17 (6.4)	76 (28.7)	12 (4.5)	126 (47.5)	126 (47.5)	28 (10.6)	23 (8.7)	24 (9.1)

*複数選択項目

「その他」の内容については、時と場合によって編成の主体が変わるというのが大部分を占めている。これらのことから、全般的にいうと、何らかの形で教師がグループの編成に関わることが多いといえよう。

この教師のグループ編成に対する関与は、具体的な編成方法についての回答からもうかがえる。そのグループ編成を行なう際の基準・方法についての結果が表2-15である。いずれの教科でも、能力・成績に関してグループ間が等質となるように配慮がなされる場合が多く（美術を除いて、37～75%）、また、予めリーダーを決めてからグループ編成を行なうという方法も多い（38～61%）。なお、数学では、すべての教師が何らかの形で名簿を使うと回答しているのは、教科の特質を示すものとして興味深い。

4) グループ編成がえについて

次に、グループの編成がえはどのように行なうかについて、編成がえまでの期間およびその契機の質問結果が表2-16、2-17に示されている。

表2-16から、編成がえの期間については、総じて、主要5教科は1学期間という回答が多くみられる（22～44%）。また、国語で1ヶ月位、必要に応じてという回答

も多い。数学、英語でも必要に応じての回答の割合が多い。これらの教科と比べて、美術、音楽、保体では、必要に応じて編成がえを行なうという回答が最も多くなっている（25～57%）。また、技家では、1年間編成がえを行わない場合が多いようである。

さらに、グループの編成がえはどのような時に行なうか、という編成がえの契機に関する結果を表2-17に示す。これによると、すべての教科において、教師がかえるべきであると判断した時と答えたものが、30～67%と多くなっている。また、主要5教科では、これとほぼ同程度の割合で、自動的に決まった期間の経過後という回答も多い（25～36%）。生徒の希望が多くなった時編成がえを行なうという回答は、英語で17%程度みられたのみで他の教科では少ない。

5) グループ学習の実施状況

ここでは、グループ学習がどのように実施されているかに関して、実施の頻度、1時間内の回数、時間について、教科別に結果をみていくことにする。

表2-18は、それぞれの教科において、グループ学習をどの位の割合で実施しているかについて尋ねた結果である。この表によると、主要5教科では、1週間に数回

表2-16 グループ編成替えの期間〔Q7-1〕

教科	1週間	1ヶ月位	1学期間	半年間位	1年間不変	必要に応じて	その他
国語(N=44)	3 (6.8)	13 (29.5)	11 (25.0)	3 (6.8)	0	9 (20.5)	5 (11.4)
数学(N=40)	0	6 (15.0)	14 (35.0)	5 (12.5)	0	11 (27.5)	4 (10.0)
理科(N=54)	0	6 (11.1)	12 (22.2)	10 (18.5)	10 (18.5)	7 (13.0)	9 (16.7)
社会(N=43)	0	8 (18.6)	17 (39.5)	1 (2.3)	2 (4.7)	7 (16.3)	8 (18.6)
英語(N=32)	0	6 (18.8)	14 (43.8)	1 (3.1)	0	7 (21.9)	4 (12.5)
美術(N=8)	0	1 (12.5)	1 (12.5)	0	1 (12.5)	2 (25.0)	3 (37.5)
音楽(N=13)	0	0	4 (30.8)	2 (15.4)	1 (7.7)	5 (38.5)	1 (7.7)
保体(N=16)	0	1 (6.3)	0	0	0	9 (56.3)	6 (37.5)
技家(N=15)	0	1 (6.7)	3 (20.0)	1 (6.7)	6 (40.0)	3 (20.0)	1 (6.7)
計(N=265)	3 (1.1)	42 (15.8)	76 (28.7)	23 (8.7)	20 (7.5)	60 (22.6)	41 (15.6)

表2-17 グループ編成替えの契機〔Q7-2〕

教科	決まった期間の経過後	教師の判断	生徒の希望	その他
国語(N=44)	16 (36.4)	15 (34.1)	5 (11.4)	8 (18.2)
数学(N=40)	12 (30.0)	16 (40.0)	4 (10.0)	8 (20.0)
理科(N=54)	18 (33.3)	18 (33.3)	9 (16.7)	9 (16.7)
社会(N=43)	14 (32.6)	13 (30.2)	4 (9.3)	12 (27.9)
英語(N=32)	8 (25.0)	18 (56.3)	3 (9.4)	3 (9.4)
美術(N=8)	0	4 (50.0)	0	4 (50.0)
音楽(N=13)	3 (23.1)	5 (38.5)	1 (7.7)	4 (30.8)
保体(N=16)	2 (12.5)	5 (31.3)	0	9 (56.3)
技家(N=15)	0	10 (66.7)	1 (6.7)	4 (26.7)
計(N=265)	73 (27.5)	104 (39.2)	27 (10.2)	61 (23.0)

小・中学校における指導の調査的研究 I

という回答が最も多くみられる(27~38%)。次いで毎時間、1週間に1回となっており、これらの教科におけるグループ学習の頻度は毎時間~1週間に1回ぐらいが多いようである。この他の教科では、保体が毎時間、美術、音楽、技家では無答が多くなっている。美術、音楽、技家は実技科目のために、一概にはグループによる学習の頻度が決められず、無答となったのではないかと考えられる。

また、各教科のグループ学習の1時限内における回数についての結果を示したのが表2-19である。美術、音楽を除く各教科とも、1~3回という回答が多く、それぞれ計80%以上を占めるに至っている。一方、美術、音楽では、3回以上と答えたものは皆無であり、殆どが、1~2回の割合となっている。以上のように、グループ学習の1時間での回数は、大部分が1~2回、多くても3回程度であるといえる。

表2-18 グループ学習の頻度〔Q8-(1)〕

教科	頻度	毎時間	1週間に数回	1週間に1回	2週間に1回	1ヶ月に1回	無答
国語(N=44)		1 (2.3)	15 (34.1)	8 (18.2)	4 (9.1)	4 (9.1)	12 (27.3)
数学(N=40)		6 (15.0)	12 (30.0)	5 (12.5)	1 (2.5)	5 (12.5)	11 (27.5)
理科(N=54)		8 (14.8)	18 (33.3)	17 (31.5)	2 (3.7)	1 (1.9)	8 (14.8)
社会(N=43)		10 (23.3)	11 (25.6)	6 (14.0)	4 (9.3)	2 (4.7)	10 (23.3)
英語(N=32)		7 (21.9)	12 (37.5)	5 (15.6)	2 (6.3)	3 (9.4)	3 (9.4)
美術(N=8)		2 (25.0)	0	1 (12.5)	1 (12.5)	0	4 (50.0)
音楽(N=13)		0	1 (7.7)	2 (15.4)	3 (23.1)	2 (15.2)	5 (38.5)
保体(N=16)		9 (56.3)	3 (18.8)	0	0	0	4 (25.0)
技家(N=15)		4 (26.7)	3 (20.0)	1 (6.7)	0	0	7 (46.7)
計 (N=265)		47 (17.7)	75 (28.3)	45 (17.0)	17 (6.4)	17 (6.4)	64 (24.2)

表2-19 1時限内のグループ学習の回数〔Q8-(2)〕

教科	回数	1回	2回	3回	4回	5回以上	無答
国語(N=44)		16 (36.4)	17 (38.6)	8 (18.2)	0	0	3 (6.8)
数学(N=40)		16 (40.0)	16 (40.0)	3 (7.5)	2 (5.0)	0	3 (7.5)
理科(N=54)		19 (35.2)	20 (37.0)	8 (14.8)	1 (1.9)	0	6 (11.6)
社会(N=43)		11 (25.6)	15 (34.9)	9 (20.9)	2 (4.7)	2 (4.7)	4 (9.3)
英語(N=32)		9 (28.1)	15 (46.9)	7 (21.9)	0	0	1 (3.1)
美術(N=8)		3 (37.5)	4 (50.0)	0	0	0	1 (12.5)
音楽(N=13)		6 (46.2)	3 (23.1)	0	0	0	4 (30.8)
保体(N=16)		2 (12.5)	5 (31.3)	6 (37.5)	2 (12.5)	0	1 (6.3)
技家(N=15)		5 (33.3)	6 (40.0)	2 (13.3)	0	0	2 (13.3)
計 (N=265)		87 (32.8)	101 (38.1)	43 (16.2)	7 (2.6)	2 (0.8)	25 (9.4)

表2-20 1回のグループ学習の時間〔Q8-(3)〕

教科	時間	2~3分	4~6分	7~10分	11~20分	21分以上	無答
国語(N=44)		1 (2.3)	9 (20.5)	14 (31.8)	12 (27.3)	5 (11.4)	3 (6.8)
数学(N=40)		1 (2.5)	11 (27.5)	12 (30.0)	9 (22.5)	3 (7.5)	4 (10.0)
理科(N=54)		3 (5.6)	7 (13.0)	17 (31.5)	17 (31.5)	5 (9.3)	5 (9.3)
社会(N=43)		2 (4.7)	9 (20.9)	15 (34.9)	12 (27.9)	2 (4.7)	3 (7.0)
英語(N=32)		2 (6.3)	13 (40.6)	16 (50.0)	0	1 (3.1)	0
美術(N=8)		0	1 (12.5)	3 (37.5)	1 (12.5)	1 (12.5)	2 (25.0)
音楽(N=13)		0	0	1 (7.7)	7 (53.8)	2 (15.4)	3 (23.1)
保体(N=16)		0	4 (25.0)	3 (18.8)	6 (37.5)	2 (12.5)	1 (6.3)
技家(N=15)		0	2 (13.3)	2 (13.3)	5 (33.3)	4 (26.7)	3 (20.0)
計 (N=265)		9 (3.4)	56 (21.1)	83 (31.3)	69 (26.0)	25 (9.4)	23 (8.7)

資 料

さらに、1回当たりのグループ学習の時間については、表2-20に示したように、主要5教科及び美術では、7～10分が最も多く(30～50%)、残りの教科では11～20分が多くなっている(33～54%)。より一般的に述べるならば、1回のグループ学習の時間は4～20分程度であるが、音楽、保体、技家などでは21分以上とする割合が13～27%ほどみられ、主要教科に比べやや長めとなっている。

先の1時限中のグループ学習の回数についての結果を考え合わせると、回数の少ない教科では、1回の時間が長くなっており、平均すると、1時限のうち15分位がグループ学習に用いられているといえるであろう。

6) グループリーダーについて

グループ学習を行なう際に、そのグループに何らかのリーダーが存在するか否か、さらに存在するとしたらどのように決めたのか、またその役割は何かなど、グループリーダーの諸特徴についての質問結果を述べる。

表2-21は、教科別にみたグループリーダーの有無の割合を示したものである。英語を除くいずれの教科も、リーダーが存在するとするものが80%近くあるいはそれ以上と、大部分を占めている。英語においても、リーダーの存在する割合は69%と高いが、他の教科に比べて低

くなっている。これは、英語では、会話練習を行なわせるためにグループを用いることが多く、そうした場合には必ずしもリーダーが必要ではないことが多いと思われる。

以下、リーダーの決め方、交替の形式、役割に関する3つの質問は、ここでリーダーが存在すると回答したも

のについてのみを分析の対象とした。

表2-21 グループリーダーの有無〔Q9〕

教科	有・無	リーダー 有	リーダー 無
	国語(N=44)	40 (90.9)	4 (9.1)
数学(N=40)	35 (87.5)	6 (11.1)	3 (7.0)
理科(N=54)	48 (88.9)	10 (31.2)	1 (12.5)
社会(N=43)	40 (93.0)	3 (23.1)	0
英語(N=32)	22 (68.8)	10 (31.2)	2 (13.3)
美術(N=8)	7 (87.5)	1 (12.5)	0
音楽(N=13)	10 (76.9)	3 (23.1)	0
保体(N=16)	16 (100.0)	0	0
技家(N=15)	13 (86.7)	2 (13.3)	0
計(N=265)	231 (87.2)	34 (12.8)	

表2-22 グループリーダーの決め方〔Q9-(1)〕

教科	決め方	予め 生徒が決める	予め 教師が決める	自然に生徒の 中から決まる	見計らって 教師の決める	その他
国語(N=40)		16 (40.0)	9 (22.5)	7 (17.5)	2 (5.0)	6 (15.0)
数学(N=35)		12 (34.3)	10 (28.6)	6 (17.1)	2 (5.7)	5 (14.3)
理科(N=48)		16 (33.3)	9 (18.8)	12 (25.0)	3 (6.3)	8 (16.7)
社会(N=40)		17 (42.5)	7 (17.5)	7 (17.5)	1 (2.5)	8 (20.0)
英語(N=22)		6 (26.1)	7 (30.4)	7 (30.4)	1 (4.3)	1 (4.3)
美術(N=7)		1 (14.3)	3 (42.9)	2 (28.6)	0	1 (14.3)
音楽(N=10)		0	2 (20.0)	6 (60.0)	0	2 (20.0)
保体(N=16)		8 (50.0)	2 (12.5)	4 (25.0)	0	2 (12.5)
技家(N=13)		7 (53.8)	4 (30.8)	1 (7.7)	0	1 (7.7)
計(N=231)		83 (35.9)	53 (22.9)	105 (45.5)	9 (3.9)	34 (14.7)

表2-23 グループリーダー交替の形式〔Q9-(2)〕

教科	形式	固定制	持ち回り制	時に 応じてかわる	その他
国語(N=40)		21 (52.5)	2 (5.0)	15 (37.5)	2 (5.0)
数学(N=35)		25 (71.4)	1 (2.9)	9 (25.7)	0
理科(N=48)		1 (2.1)	37 (77.1)	4 (8.3)	6 (12.5)
社会(N=40)		27 (67.5)	4 (10.0)	8 (20.0)	9 (22.5)
英語(N=22)		16 (69.6)	1 (4.3)	4 (17.4)	1 (4.3)
美術(N=7)		3 (42.9)	0	4 (57.1)	0
音楽(N=10)		7 (70.0)	0	2 (20.0)	1 (10.0)
保体(N=16)		10 (62.5)	1 (6.3)	4 (25.0)	1 (6.3)
技家(N=13)		10 (76.9)	1 (7.7)	2 (15.4)	0
計(N=231)		120 (51.9)	47 (20.3)	52 (22.5)	20 (8.7)

ついて尋ねた結果である。英語、美術、音楽を除く各教科では、予め生徒が決めるとするものが33～54%と最も高い割合を示している。英語では、予め教師が決める、自然に生徒の中から決まるとする回答が、同程度に多く(30%)、美術では、予め教師が決める(43%)、音楽では、自然に生徒の中から決まる(60%)の割合が最も高い。

表2-23は、リーダーが固定制か、それとも持ち回り制か、というリーダーの交替の形式についての質問結果である。国語では約半数が、また理科、美術を除く他の教科では2/3以上が、リーダーの固定制をとっている。これに対し、理科では77%が持ち回り制、美術では57%が時に応じてかわる、としている。このように、一般にグループリーダーは固定されている場合が多いが、理科に限っては、大部分が持ち回り制をとっており特徴的である。

表2-24には、リーダーはどのような役割を担っているかについての質問結果が示されている。いずれの教科においても、グループの意見をまとめるという役割をあげている割合が高い。とくに、国語では全教師がそれを役割としてあげている。また、数学、理科、社会、美術、

保体、技家でも最も高い割合を示している。さらに、これらの教科では、これに次いで、司会の役割が多くなっている。一方、英語、音楽では、わからない子に教えるという役割が最も多く特徴的である。

7) グループのまとまりについて

グループ学習を用いて授業を行なった場合における、グループのまとまり具合、さらにそのまとまりの基準、まとまるまでの期間についての質問結果を以下に示す。

表2-25は、グループのまとまり具合についての結果である。いずれの教科でも、グループによってまとまり具合は異なるとするものが60～92%と大半を占めている。一方、どのグループもあまりまとまっていないとする回答は少なく、グループによってまとまりの程度は異なるが、全体としてまとまりは悪くないようである。

表2-26は、上述のまとまり具合を、どのような観点から判断したのかについての回答結果である。いずれの教科においても、協力して勉強するが80%程度から90%を占めており、グループ内の協調性によってまとまり具合を判断しているといえる。

先のまとまり具合の結果を考え合わせると、グループ

表2-24 グループリーダーの役割* [Q9-(3)]

教科	役割	司会	意見のまとめ	わからない子に教える	連絡	授業態度の監督	その他
国語(N=40)		25 (62.5)	40(100.0)	16 (40.0)	6 (15.0)	1 (2.5)	0
数学(N=35)		25 (71.4)	29 (82.9)	18 (51.4)	6 (17.1)	1 (2.9)	0
理科(N=48)		23 (47.9)	43 (89.6)	16 (33.3)	17 (35.4)	1 (2.1)	0
社会(N=40)		24 (60.0)	38 (95.0)	13 (32.5)	4 (10.0)	3 (7.5)	0
英語(N=22)		13 (56.5)	17 (73.9)	18 (78.3)	6 (26.1)	2 (8.7)	0
美術(N=7)		3 (42.9)	5 (71.4)	4 (57.1)	2 (28.6)	1 (14.1)	0
音楽(N=10)		1 (10.0)	7 (70.0)	9 (90.0)	3 (30.0)	2 (20.0)	0
保体(N=16)		4 (25.0)	12 (75.0)	7 (43.8)	6 (37.5)	3 (18.8)	0
技家(N=13)		4 (30.8)	12 (92.3)	7 (53.8)	3 (23.1)	2 (15.4)	0
計(N=231)		122 (52.8)	203 (87.9)	108 (46.8)	53 (22.9)	16 (6.9)	0

*複数選択項目

表2-25 グループのまとまり具合 [Q10-(1)]

教科	程度	よくまとまっている	あまりまとまっていない	グループによって違う	その他
国語(N=44)		4 (9.1)	1 (2.3)	37 (84.1)	2 (4.5)
数学(N=40)		6 (15.0)	0	34 (85.0)	0
理科(N=54)		5 (9.3)	2 (3.7)	45 (83.3)	2 (3.7)
社会(N=43)		8 (18.6)	0	35 (81.4)	0
英語(N=32)		8 (25.0)	0	24 (75.0)	0
美術(N=8)		3 (37.5)	0	8 (62.5)	0
音楽(N=13)		0	1 (7.7)	12 (92.3)	0
保体(N=16)		2 (12.5)	0	14 (87.5)	0
技家(N=15)		6 (40.0)	0	9 (60.0)	0
計(N=265)		42 (15.8)	4 (1.5)	215 (81.1)	4 (1.5)

小・中学校における指導の調査的研究 I

によって多少異なるが、グループ学習を行なっている場合には、協調性は高いことがうかがえる。

グループを編成してから、まとまりがみられるようになるまで、どの位の期間を要するかについての回答結果を表2-27に示す。国語、数学、保体では1週間位が最も多く、社会、英語、美術、音楽では2週間位、さらに、理科では、はやくて1週間位、長くても1ヶ月位でまとまるようである。技家は、他の教科に比べやや長い期間がかかり、2週間から1ヶ月位でまとまるようである。

全体的にみると、1週間から2週間でまとまる場合が多く、遅くとも1ヶ月位過ぎた後には、ほとんどのグループがまとまりをみせるといえよう。

これまで、グループ内のまとまりについてみてきたが、ここでは、学級内のグループ相互の関係について、競争的であるか、協同的であるかについて尋ねた結果をみてる。表2-28をみると、保体、技家を除くいずれの教科においても、どちらともいえないという回答が最も多くなっている。保体、技家では、グループ間の関係は協

表2-26 グループのまとまりの評価基準*(Q10-(2))

基準 教科	授業態度が よい	協力して 勉強する	皆の仲がよい	その他
国語(N=44)	2 (4.5)	37 (84.1)	5 (11.4)	2 (4.5)
数学(N=40)	6 (15.0)	35 (87.5)	2 (5.0)	0
理科(N=54)	7 (13.0)	45 (83.3)	4 (7.4)	3 (5.6)
社会(N=43)	6 (14.0)	34 (79.1)	1 (2.3)	6 (14.0)
英語(N=32)	4 (12.5)	30 (93.8)	3 (9.4)	1 (3.1)
美術(N=8)	1 (12.5)	7 (87.5)	1 (12.5)	1 (12.5)
音楽(N=13)	1 (7.7)	12 (92.3)	0	1 (7.7)
保体(N=16)	2 (12.5)	13 (81.3)	1 (6.3)	1 (6.3)
技家(N=15)	1 (13.3)	13 (86.7)	0	1 (13.3)
計(N=265)	31 (11.7)	226 (85.3)	17 (6.4)	16 (6.0)

*複数選択項目

表2-27 グループのまとまるまでの期間(Q10-(3))

期間 教科	1週間以内	1週間位	2週間位	3週間位	1ヶ月位	2ヶ月位	3ヶ月以上	無答
国語(N=44)	9 (20.5)	14 (31.8)	5 (11.4)	4 (9.1)	7 (16.0)	0	2 (4.5)	3 (6.8)
数学(N=40)	7 (17.5)	13 (32.5)	6 (15.0)	4 (10.0)	7 (17.5)	1 (2.5)	0	2 (5.0)
理科(N=54)	5 (9.3)	12 (22.2)	10 (18.5)	5 (9.3)	15 (27.8)	3 (5.6)	0	4 (7.4)
社会(N=43)	6 (14.0)	8 (18.6)	16 (37.2)	4 (9.3)	8 (18.6)	0	0	1 (2.3)
英語(N=32)	7 (21.9)	3 (9.4)	9 (28.1)	3 (9.4)	8 (25.0)	0	0	2 (6.3)
美術(N=8)	3 (37.5)	0	3 (37.5)	0	2 (25.0)	0	0	0
音楽(N=13)	0	1 (7.7)	7 (53.8)	2 (15.4)	1 (7.7)	0	1 (7.7)	1 (7.7)
保体(N=16)	5 (31.3)	5 (31.3)	3 (18.8)	1 (6.3)	1 (6.3)	0	0	1 (6.3)
技家(N=15)	0	1 (6.7)	5 (33.3)	1 (6.7)	7 (46.7)	0	0	1 (6.7)
計(N=265)	42 (15.8)	57 (21.5)	64 (24.2)	24 (9.1)	56 (21.1)	4 (1.5)	3 (1.1)	15 (5.7)

表2-28 グループ間の関係

関係 教科	競争的	協同的	どちらとも いえない	無答
国語(N=44)	5 (11.4)	14 (31.8)	25 (56.8)	0
数学(N=40)	1 (2.5)	11 (27.5)	28 (70.0)	0
理科(N=54)	4 (7.4)	18 (33.3)	29 (53.7)	3 (5.5)
社会(N=43)	11 (25.6)	10 (23.3)	22 (51.2)	0
英語(N=32)	5 (15.6)	7 (21.9)	19 (59.3)	1 (3.1)
美術(N=8)	1 (12.5)	3 (37.5)	4 (50.0)	0
音楽(N=13)	2 (15.4)	5 (38.5)	6 (46.7)	0
保体(N=16)	3 (18.8)	8 (50.0)	5 (31.3)	0
技家(N=15)	2 (13.3)	7 (46.7)	6 (40.0)	0
計(N=265)	34 (12.8)	83 (31.2)	144 (54.3)	4 (1.5)

小・中学校における指導の調査的研究 I

表 2-29 グループ学習結果の発表方法〔Q11〕

方法 教科	討論・学習 の直後	授業の終り	適宜	特別な時間 を設ける	発表はしない	その他
国語(N=44)	17 (38.6)	0	14 (31.8)	1 (2.3)	1 (2.3)	11 (25.0)
数学(N=40)	13 (32.5)	0	21 (52.5)	2 (5.0)	2 (5.0)	2 (5.0)
理科(N=54)	17 (31.5)	2 (3.7)	25 (46.3)	1 (1.9)	0	9 (16.7)
社会(N=43)	17 (39.5)	3 (7.0)	17 (39.5)	2 (4.7)	0	4 (9.3)
英語(N=32)	10 (31.3)	0	20 (62.5)	1 (3.1)	1 (3.1)	0
美術(N=8)	3 (37.5)	0	3 (37.5)	0	0	2 (25.0)
音楽(N=13)	3 (23.1)	0	4 (30.8)	5 (38.5)	0	1 (7.7)
保体(N=16)	2 (12.5)	3 (18.8)	5 (31.3)	2 (12.5)	0	4 (25.0)
技家(N=15)	4 (26.7)	0	7 (46.7)	1 (6.7)	1 (6.7)	2 (13.3)
計(N=265)	86 (32.5)	8 (3.0)	116 (43.8)	15 (5.7)	5 (1.9)	35 (13.2)

表 2-30 グループ学習の評価方法〔Q12〕

評価 教科	グループの 成績重視	グループへの 参加度重視	個々人の成績 重視	その他
国語(N=44)	3 (6.8)	29 (65.9)	10 (22.7)	2 (4.5)
数学(N=40)	3 (7.5)	23 (57.5)	13 (32.5)	1 (2.5)
理科(N=54)	6 (11.1)	32 (59.3)	12 (22.2)	4 (7.4)
社会(N=43)	5 (11.6)	26 (60.5)	9 (20.9)	3 (7.0)
英語(N=32)	6 (18.8)	16 (50.0)	8 (25.0)	2 (6.3)
美術(N=8)	2 (25.0)	4 (50.0)	0	2 (25.0)
音楽(N=13)	4 (30.8)	6 (46.2)	1 (7.7)	2 (15.4)
保体(N=16)	3 (18.8)	10 (62.5)	1 (6.3)	2 (12.5)
技家(N=15)	1 (6.7)	7 (46.7)	7 (46.7)	0
計(N=265)	33 (12.5)	153 (57.7)	61 (23.0)	18 (6.8)

同的であるとする回答が50%近くみられる。さらに、このどちらともいえないという回答を除くと、協同的であるとする場合が多く(20~39%)、グループ間の関係は競争的ではなく、協同的な傾向がみられるといえよう。ただ、社会においては、競争的であるとする割合も多く、他の教科とは異なっており、特徴的である。

8) グループ学習結果の発表方法

グループによる討論・学習の結果を学級全体にいつ発表させるかについての回答を求めた結果を表2-29に示す。いずれの教科でも、適宜・必要に応じて発表させるという回答が多くみられ(30~63%)、次いで、討論・学習の直後という回答が多くなっている(13~40%)。ただ、国語、社会、美術では、この両者の割合が同程度みられる。また、音楽では、特別な時間を設けて発表させる場合が最も多い(39%)。これは、発表会といった形で行なうことが多いことを示していると思われる。発表させないという回答は、いずれの教科でも非常に少なく、何らかの形でグループ学習の結果を、学級全体に発表させているといえる。

9) グループ学習の評価方法

表2-30は、グループによる学習の成績を評価する場

合、どのような点を重視するかについて尋ねた結果である。いずれの教科において、グループへの参加度を重視する割合が多い(47~66%)。また、これに次いで、主要5教科及び技家では、個々人の成績を重視する傾向がみられる。ただ、美術、音楽ではグループの成績を重視する割合も高い。これは、共同製作、演奏、合唱といった機会が多いためと思われる。全般的にみると、グループ学習においては、グループ全体の成績を個々人の成績として重視するよりも、各成員がグループ学習に積極的に参加したか否かを、評価の観点として重視しているといえよう。

文 献

- 岸田元美・池田秀男 1975 学習指導形態に関する調査研究 徳島大学教育学部研究紀要 26, 17-31.
- 宮城県教育研究所 1968 学習指導の近代化に関する研究(第1次報告) - 教師の学習指導観について - 研究紀要 63, 1-70.
- 水沢浩子 1979 グループ学習に関する研究 - 教師の集団に対する指向性と学習指導形態との関連 - 名古屋

資

料

屋大学教育学部教育心理学科提出卒業論文
名古屋市教育館 1969 学習指導の改善に関する調査研
究報告 4305, 1-39.
高桑康雄 1971 日本における小集団研究 木原健太郎
編 講座・小集団指導 第1巻「小集団指導の基礎

理論」104-127.
全国教育研究所連盟 1971 学習指導近代化の課題—教
師の学習指導観調査による— 東洋館出版社
(1980年7月31日 受稿)

資料 1.

小学校用

第 1 部：学習指導形態に関する調査

この一年間に担当された授業についておたずねします。その際、
 1) 担任学級をおもちの場合には、その学級におけるこの一年間の授業について
 2) 担任学級をおもちでない場合には、教科を担当している学級全般のこの一年間の授業について、お答え下さい。

<1>授業の展開の中で、どのような学習形態を重視して用いましたか。
 (1) 左にあげた各教科について、右に掲げた学習指導形態の中から、あてはまるものを選んで () の中にその記号を記入して下さい。ただし、担当されていない教科については空欄にしておいて下さい。なお、ここであげた 3 つの指導形態は次の意味で用いています。

- 一斉学習……………学級の全員を対象として、同一内容を同時に指導する形態で、
 たとえば、
 a 全員対象の説明、解説、講義、まとめなどを重視する場合
 b 全員で行なう一斉練習を重視する場合
 c 全員を対象とした問答法による指導を重視する場合などである。
- グループ学習……………学級を分団または小グループに分けて指導する形態で、
 たとえば、
 a グループによる話し合い、問題解決を重視する場合
 b グループによる練習、協同作業を重視する場合などである。
- 個別学習……………生徒一人一人を対象にして指導する形態で、
 たとえば、
 a 机間巡視による個人指導を重視する場合
 b アナライザー、プログラム学習による個人指導を重視する場合などである。

教科	学習指導形態
国 語 ()	1. 主に一斉学習
算 数 ()	2. 主にグループ学習
理 科 ()	3. 主に個別学習
社 会 ()	4. 一斉学習とグループ学習
図画工作 ()	5. グループ学習と個別学習
音 楽 ()	6. 一斉学習と個別学習
体 育 ()	7. 一斉学習、グループ学習、及び個別学習
技術家庭 ()	8. その他 ()

(2) 授業で重視している学習指導形態について先ほど答えていただきましたが、その理由を次にあげるものの中から選んで下さい。
 なお、各教科について別々に選択し、() の中にその番号を記入して下さい。選択は 1 つ以上でもかまいません。ただし、担当していない教科については空欄にしておいて下さい。

教 科	
国 語 ()	図画工作 ()
算 数 ()	音 楽 ()
理 科 ()	体 育 ()
社 会 ()	技術家庭 ()

理 由

1. 教材・器具の都合上便利であるから
2. 落ちこぼれを少なくしたり、救ったりすることができるから
3. 授業の進行為スムーズにできるから
4. 子ども同士の相互交渉が生じやすいから
5. 授業内容を理解させるのに適しているから
6. よい人間関係、仲間意識が育ちやすいから
7. 授業計画がたてやすいから
8. 無駄な競争をさけることができるから
9. 教師が臨機応変に授業を進めることができるから
10. 子どもの能力・適性に応じた指導ができるから
11. 知識の定着をより確実にさせることができるから
12. グループの一員として、グループのためにつくすことを学べるから
13. 学習に対する満足度が高まるから
14. 協調性を育てることができるから
15. できる子とできない子の差をちぢめられるから
16. 学習に対する参加度が高まるから
17. 子どもの異質の意見交換によって、思考を深めることができるから
18. 子どもに劣等感・疎外感をおこさにくくから
19. 学級全体の学力を高めることができるから
20. 子どもの主体性をのばすことができるから
21. 子どもの競争心を効果的に使うことができるから
22. 子ども同士の相互批判ができるから
23. その他 ()
24. その他 ()

<2>ここでは先生がふだん実践されている授業の形態についてうかがいます。

(1) 1 時間の授業時間において、最も頻繁に行なわれた授業の流れ(展開)を、そこで用いられた学習指導形態にしたがって、パターン化して、下の欄に記入して下さい。記入の仕方は、例のようです。いくつかある場合には、主なものを 3 つまで書いて下さい。
 なお、一斉学習を C、グループ学習を G、個別学習を I、と記号化します。
 例 1) 1 時間の始めから終わりまでグループによる話し合いをした場合の記入例。

1 時間の授業の流れ G

資 料

例2) 1時間の始めに問題を全員に解説し、次に個別に問題を解く。その後、グループによる話し合いを行ない最後に教師がまとめる場合の記入例。

1時間の授業の流れ C → I → G → C

記入欄

1時間の授業の流れ

1時間の授業の流れ

1時間の授業の流れ

<3> 次の質問について、あてはまるものを選んで○をつけて下さい。

(1) 学級全体の子どものまとまり具合はどのようですか。

1. 非常によくまとまっている
 2. どちらかといえばまとまっている
 3. どちらかといえばあまりまとまっていない
 4. あまりまとまっていない

(2) カリキュラムは予定通り進行しましたか。

1. 予定通り進行した
 2. ある程度進行した
 3. あまり進行しなかった
 4. かなり残ってしまった

(3) 子どもたちは進んで授業に取り組みましたか。

1. 消極的であった
 2. あまり積極的ではなかった
 3. かなり積極的であった
 4. 非常に積極的であった

(4) 子どもたちの学力はどのように伸びましたか。

1. よくできる子もできない子も伸びた
 2. よくできる子が伸びた
 3. あまりできない子が伸びた
 4. あまり変化はみられなかった

(5) 子どもたちは自分の意見をはっきり述べることができましたか。

1. 自分の意見をはっきり述べられない子が多い
 2. 殆んどの子が自分の意見をはっきり述べるができる
 3. 自分の意見をはっきりいえる子といえない子が半々ぐらいである

<4> 今後の指導形態についておたずねします。次のうち、将来、取り入れてみたいと思っている指導方法がありましたら○をつけて下さい。(今の指導方法を今後も続けたいと思われる場合は、その指導形態にも○をつけて下さい。)

- | | |
|-----------|----------------------------------|
| 1. 一斉学習 | 7. 問題解決学習 |
| 2. 個別学習 | 8. 仮説実験学習 |
| 3. 能力別学習 | 9. プログラム学習 |
| 4. グループ学習 | 10. 視聴覚学習 |
| 5. 発見学習 | 11. 主体的学習 |
| 6. 系統学習 | 12. その他 () |

〔グループによる学習指導に関する調査〕

ここでは、この一年間何らかの形でグループを用いた学習指導を少しでも行なったことのある先生方にお伺いします。主に一斉学習、個別学習を選んだ先生もグループを用いたことがあればお答え下さい。(グループを用いた指導を行なったことのない先生は13ページの第2部の調査にお進み下さい)

<5> グループ構成について、次の質問にお答え下さい。

(1) グループの構成人数は何人位ですか。()の中に人数を記入して下さい。

()人

(2) グループの性構成は次のいずれですか。あてはまるものに○をつけて下さい。

1. 男子、女子別々のグループ
 2. 男女混合グループ

<6> グループ編成はどのように行ないますか。次の質問についてあてはまるものを選んで○をつけて下さい。

(1) グループ編成は主に誰が行ないますか。

1. 教師が編成する
 2. 生徒が編成する
 3. 教師・生徒が相談して編成する
 4. その他 ()

(2) 具体的にはどのような方法でグループを編成しますか。○は1つ以上でもかまいません。

1. ソシオメトリックラストを用いて行なう
 2. 名簿順で決める
 3. 能力別のグループをつくる
 4. グループ間に能力・成績の差がないようにする
 5. リーダーを予め決めておいてからグループを決める
 6. 好きなもの同士が集まるようにする
 7. くじなどを用いて行なう
 8. その他 ()

小・中学校における指導の調査的研究 I

<7>グループの編成がえはどのように行ないますか。次の質問についてあてはまるものに○をつけて下さい。

(1) グループ編成がえはどの位の期間をもって行ないますか。

- | | |
|-------------|---------------|
| 1. 毎日かえる | 5. 半年間位でかえる |
| 2. 1週間位でかえる | 6. 1年間かえない |
| 3. 1ヶ月位でかえる | 7. 必要に応じ適宜かえる |
| 4. 1学期でかえる | 8. その他 () |

(2) グループの編成がえはどのような時に行ないますか。

- | |
|---------------------|
| 1. 自動的に決まった期間が過ぎたとき |
| 2. 教師がかえるべきだと判断したとき |
| 3. 生徒からの希望が多くなったとき |
| 4. その他 () |

<8>グループによる学習の回数、時間はどの位ですか。各教科ごとに答え下さい。ただし、担当されていない教科については空欄にしておいて下さい。

(1) グループによる学習をどの位の割合で実施していますか。あてはまるものを選んで、その記号を () の中に記入して下さい。

- | | |
|----------|----------------|
| 国語 () | 1. 毎時間必ず実施する |
| 算数 () | 2. 1週間に数回実施する |
| 理科 () | 3. 1週間に1回位実施する |
| 社会 () | 4. 2週間に1回位実施する |
| 図画工作 () | 5. 1ヶ月に1回実施する |
| 音楽 () | 6. その他 () |
| 体育 () | |
| 技術家庭 () | |

(2) グループによる学習を行なう場合、1時間の授業で何回位行ないますか。() の中に記入して下さい。

- | | |
|----------|------------|
| 国語 () 回 | 図画工作 () 回 |
| 算数 () 回 | 音楽 () 回 |
| 理科 () 回 | 体育 () 回 |
| 社会 () 回 | 技術家庭 () 回 |

(3) その際に、グループによる学習の1回の時間は何分位ですか。() の中に記入して下さい。

- | | |
|----------|------------|
| 国語 () 分 | 図画工作 () 分 |
| 算数 () 分 | 音楽 () 分 |
| 理科 () 分 | 体育 () 分 |
| 社会 () 分 | 技術家庭 () 分 |

<9>グループによる学習では、リーダーはいますか。あてはまる方に○をつけて下さい。

- | | |
|-------|--------|
| 1. いる | 2. いない |
|-------|--------|

※ 次の3つの質問については、リーダーがいるとお答えの場合のみ答えて下さい。

(1) リーダーはどのようにして決めますか。あてはまるものに○をつけ、その具体的な方法を () の中に記入して下さい。

- | |
|-------------------------------|
| 1. 予め生徒が決める
方法 () |
| 2. 予め教師が決める
方法 () |
| 3. 自然に生徒の中から決まる
方法 () |
| 4. ある時間が過ぎてから教師が決める
方法 () |
| 5. その他 ()
方法 () |

(2) リーダーは固定的ですか、それとも持ち回り制ですか。次の中からあてはまるものを選んで○をつけて下さい。

- | |
|-----------------------------|
| 1. リーダーは原則としてグループがまえて固定している |
| 2. リーダーはグループ内で持ち回り制である |
| 3. その時々に応じてリーダーはかわる |
| 4. その他 () |

(3) リーダーの役割について、あてはまるものに○をつけて下さい。選択は1つ以上でもかまいません。

- | |
|-----------------|
| 1. 司会をする |
| 2. グループの意見をまとめる |
| 3. わからない子に教える |
| 4. 教師との連絡係 |
| 5. 他の成員の授業態度の監督 |
| 6. その他 () |

<10>次の4つの質問について、あてはまるものに○をつけて下さい。

(1) グループ内の子どものまとまり具合はどうですか。

- | |
|--------------------------------|
| 1. どのグループもよくまとまっている |
| 2. どのグループもあまりよくまとまっていない |
| 3. まとまっているグループとまとまっていないグループがある |

(2) グループ内のまとまり具合について、どのような観点から判断しましたか。選択は1つ以上でもかまいません。

- | |
|-----------------------|
| 1. グループ内の皆の授業態度がよい |
| 2. グループ内の皆が協力して勉強している |
| 3. グループ内の皆の仲が良い |
| 4. その他 () |

(3) グループを編成してからそのグループがまとまるまでにどの位の期間がかかりましたか。

- | | |
|----------|----------|
| 1. 1週間以内 | 5. 1ヶ月位 |
| 2. 1週間位 | 6. 2ヶ月位 |
| 3. 2週間位 | 7. 3ヶ月以上 |
| 4. 3週間位 | |

(4) グループ相互の関係はどのようなですか。

1. 互いに競争的である
2. 互いに協同的である
3. どちらともいえない

<11>グループによる討論あるいは学習した結果を、学級全体にどのように発表させていますか。次の中からあてはまるものに○をつけて下さい。

1. グループによる討論あるいは学習のすぐ後に、学級全体にグループの結果を発表させる
2. 授業の終わりに、学級全体にグループの結果を発表させる
3. 必要に応じて、学級全体にグループの結果を発表させる
4. 特別な時間を設けて、学級全体にグループの結果を発表させる
5. グループ内でまとめるだけで特に発表させない
6. その他 ()

<12>グループによる学習の成績を評価する場合、どのような点を重視しますか。あてはまるものに○をつけて下さい。

1. グループの成績を、個々の成員の成績として重視する
2. グループの成績よりも、個々の成員のグループへの参加の度合を重視する
3. グループの成績よりも、個々の成員の成績を重視する
4. その他 ()

資料 2.

中学校用

第 1 部：学習指導形態に関する調査

この一年間の授業についておたずねします。その際、教科を担当している学級全般のこの一年間の授業についてお答え下さい。

<1>授業の展開の中で、どのような学習形態を重視して用いましたか。

(1) 次の中からあてはまるものを選んで○をつけて下さい。なお、ここであげた3つの指導形態は次の意味で用います。

- 一斉学習……………学級の全員を対象として、同一内容を同時に指導する形態で、
 たとえば、
 a 全員対象の説明、解説、講義、まとめなどを重視する場合
 b 全員で行なう一斉練習を重視する場合
 c 全員を対象とした問答法による指導を重視する場合
 などである。
- グループ学習……………学級を分団または小グループに分けて指導する形態で、
 たとえば、
 a グループによる話し合い、問題解決を重視する場合
 b グループによる練習、協同作業を重視する場合
 などである。
- 個別学習……………生徒一人一人を対象にして指導する形態で、
 たとえば、
 a 机間巡視による個人指導を重視する場合
 b アナライザー、プログラム学習による個人指導を重視する場合
 などである。

1. 主に一斉学習
2. 主にグループ学習
3. 主に個別学習
4. 一斉学習とグループ学習
5. グループ学習と個別学習
6. 一斉学習と個別学習
7. 一斉学習、グループ学習、及び個別学習
8. その他 ()

(2) 授業で重視している学習指導形態について先ほど答えていただきましたが、その理由を次にあげるものの中から選んで○をつけて下さい。選択は1つ以上でもかまいません。

1. 教材・器具の都合上便利であるから
2. 落ちこぼれを少なくしたり、救ったりすることができるから
3. 授業の進行がスムーズにできるから
4. 子ども同士の相互交渉が生じやすいから
5. 授業内容を理解させるのに適しているから
6. よい人間関係、仲間意識が育ちやすいから
7. 授業計画がたてやすいから

8. 無駄な競争をさけることができるから
9. 教師が臨機応変に授業を進めることができるから
10. 子どもの能力・適性に応じた指導ができるから
11. 知識の定着をより確実にさせることができるから
12. グループの一員として、グループのためにつくすことを学べるから
13. 学習に対する満足度が高まるから
14. 協調性を育てることができるから
15. できる子とできない子の差をちぢめられるから
16. 学習に対する参加度が高まるから
17. 子どもの異質の意見交換によって、思考を深めることができるから
18. 子どもに劣等感・疎外感をおこさにくいから
19. 学級全体の学力を高めることができるから
20. 子どもの主体性をのばすことができるから
21. 子どもの競争心を効果的に使うことができるから
22. 子ども同士の相互批判ができるから
23. その他 ()
24. その他 ()

<2>ここでは先生がふだん実践されている授業の形態についてうかがいます。

(1) 1時間の授業時間において、最も頻繁に行なわれた授業の流れ(展開)を、そこで用いられた学習指導形態にしたがって、パターン化して、下の欄に記入して下さい。記入の仕方は、例のようです。いくつかある場合には、主なものを3つまで書いて下さい。

なお、一斉学習をC、グループ学習をG、個別学習をI、と記号化します。

例1) 1時間の始めから終わりまでグループによる話し合いをした場合の記入例。

1時間の授業の流れ G

例2) 1時間の始めに問題を全員に解説し、次に個別に問題を解く。その後、グループによる話し合いを行ない最後に教師がまとめる場合の記入例。

1時間の授業の流れ C→I→G→C

記入欄

1時間の授業の流れ

1時間の授業の流れ

1時間の授業の流れ

<3>次の各質問について、あてはまるものを選んで○をつけて下さい。

(1) 学級全体の子どもたちのまとめ具合はどのようですか。

1. 非常によくまとまっている
2. どちらかといえばまとまっている
3. どちらかといえばあまりまとまっていない
4. あまりまとまっていない

資

料

(2) カリキュラムは予定通り進行しましたか。

1. 予定通り進行した
2. ある程度進行した
3. あまり進行しなかった
4. かなり残ってしまった

(3) 子どもたちは進んで授業に取り組みましたか。

1. 消極的であった
2. あまり積極的ではなかった
3. かなり積極的であった
4. 非常に積極的であった

(4) 子どもたちの学力はどのように伸びましたか。

1. よくできる子どもできない子ども伸びた
2. よくできる子が伸びた
3. あまりできない子が伸びた
4. あまり変化はみられなかった

(5) 子どもたちは自分の意見をはっきり述べることができましたか。

1. 自分の意見をはっきり述べられない子が多い
2. 殆んどの子が自分の意見をはっきり述べるができる
3. 自分の意見をはっきりいえる子といえない子が半々ぐらいである

<4>今後の指導形態についておたずねします。次のうち、将来、取り入れてみたいと思っている指導方法がありましたら○をつけて下さい。(今の指導方法を今後も続けたいと思われる場合は、その指導形態にも○をつけて下さい。)

- | | |
|-----------|-------------|
| 1. 一斉学習 | 7. 問題解決学習 |
| 2. 個別学習 | 8. 仮説実験学習 |
| 3. 能力別学習 | 9. プログラム学習 |
| 4. グループ学習 | 10. 視聴覚学習 |
| 5. 発見学習 | 11. 主体的学習 |
| 6. 系統学習 | 12. その他 () |

[グループによる学習指導に関する調査]

ここでは、この一年間、何らかの形でグループを用いた学習指導を少しでも行なったことのある先生方にお伺いします。主に一斉学習、個別学習を選んだ先生もグループを用いたことがあればお答え下さい。(グループを用いた指導を行なったことのない先生は12ページの第2部の調査にお進み下さい)

<5>グループ構成について、次の質問にお答え下さい。

(1) グループの構成人数は何人位ですか。()の中に人数を記入して下さい。

() 人

(2) グループの性構成は次のいずれですか。あてはまるものに○をつけて下さい。

1. 男子、女子別々のグループ
2. 男女混合グループ

<6>グループ編成はどのように行ないますか。次の質問についてあてはまるものを選んで○をつけて下さい。

(1) グループ編成は主に誰が行ないますか。

1. 教師が編成する
2. 生徒が編成する
3. 教師・生徒が相談して編成する
4. その他 ()

(2) 具体的にはどのような方法でグループを編成しますか。○は1つ以上でもかまいません。

1. ソシオメトリックラストを用いて行なう
2. 名簿順で決める
3. 能力別のグループをつくる
4. グループ間に能力成績の差がないようにする
5. リーダーを予め決めておいてからグループを決める
6. 好きなもの同士が集まるようにする
7. くじなどを用いて行なう
8. その他 ()

<7>グループの編成がえはどのように行ないますか。次の質問についてあてはまるものに○をつけて下さい。

(1) グループ編成がえはどの位の期間をもって行ないますか。

- | | |
|--------------|---------------|
| 1. 毎日かえる | 5. 半年間位でかえる |
| 2. 1週間位でかえる | 6. 1年間かえない |
| 3. 1ヶ月間位でかえる | 7. 必要に応じ適宜かえる |
| 4. 1学期間でかえる | 8. その他 () |

(2) グループの編成がえはどのような時に行ないますか。

1. 自動的に決まった期間が過ぎたとき
2. 教師がかえるべきだと判断したとき
3. 生徒からの希望が多くなったとき
4. その他 ()

<8>グループによる学習の回数、時間について、次の質問にお答え下さい。

(1) グループによる学習をどの位の割合で実施していますか。次の中からあてはまるものを選んで○をつけて下さい。

1. 毎時間必ず実施する
2. 1週間に数回実施する
3. 1週間に1回位実施する
4. 2週間に1回位実施する
5. 1ヶ月に1回位実施する
6. その他 ()

小・中学校における指導の調査的研究 I

(2) グループによる学習を行なう場合、1時間の授業の中で何回行ないますか。()の中に回数を記入して下さい。

() 回

(3) その際に、1回のグループによる学習の時間は何分位ですか。()の中に記入して下さい。

1回()分

<9>グループによる学習では、リーダーはいますか。あてはまる方に○をつけて下さい。

1. いる 2. いない

※ 次の3つの質問については、リーダーがいるとお答えの場合にのみ答えて下さい。

(1) リーダーはどのようにして決めますか。あてはまるものに○をつけ、その具体的な方法を()の中に記入して下さい。

1. 予め生徒が決める方法()
 2. 予め教師が決める方法()
 3. 自然に生徒の中から決まる方法()
 4. ある時間が過ぎてから教師が決める方法()
 5. その他()
 方法()

(2) リーダーは固定的ですか、それとも持ち回り制ですか。次の中からあてはまるものを選んで○をつけて下さい。

1. リーダーは原則としてグループがまえで固定している
 2. リーダーはグループ内で持ち回り制である
 3. その時々に応じてリーダーはかわる
 4. その他()

(3) リーダーの役割について、あてはまるものに○をつけて下さい。選択は1つ以上でもかまいません。

1. 司会をする
 2. グループの意見をまとめる
 3. わからない子に教える
 4. 教師との連絡係
 5. 他の成員の授業態度の監督
 6. その他()

<10>次の4つの質問について、あてはまるものに○をつけて下さい。

(1) グループ内の子どものまとまり具合はどうか。

1. どのグループもよくまとまっている
 2. どのグループもあまりよくまとまっていない
 3. まとまっているグループとまとまっていないグループがある

(2) グループ内のまとまり具合について、どのような観点から判断しましたか。選択は1つ以上でもかまいません。

1. グループ内の皆の授業態度がよい
 2. グループ内の皆が協力して勉強している
 3. グループ内の皆の仲が良い
 4. その他()

(3) グループを編成してからそのグループがまとまるまでにどの位の時間がかかりましたか。

1. 1週間以内 5. 1ヶ月位
 2. 1週間位 6. 2ヶ月位
 3. 2週間位 7. 3ヶ月以上
 4. 3週間位

(4) グループ相互の関係はどのようですか。

1. 互いに競争的である
 2. 互いに協同的である
 3. どちらともいえない

<11>グループによる討論あるいは学習した結果を、学級全体にどのように発表させていますか。次の中からあてはまるものに○をつけて下さい。

1. グループによる討論あるいは学習のすぐ後に、学級全体にグループの結果を発表させる
 2. 授業の終わりに、学級全体にグループの結果を発表させる
 3. 必要に応じて、学級全体にグループの結果を発表させる
 4. 特別な時間を設けて、学級全体にグループの結果を発表させる
 5. グループ内でまとめるだけで特に発表させない
 6. その他()

<12>グループによる学習の成績を評価する場合、どのような点を重視しますか。あてはまるものに○をつけて下さい。

1. グループの成績を、個々の成員の成績として重視する
 2. グループの成績よりも、個々の成員のグループへの参加の度を重視する
 3. グループの成績よりも、個々の成員の成績を重視する
 4. その他()